

公益財団法人さわやか福祉財団 共生社会助成事業  
公益財団法人あしたの日本を創る協会 政策提言助成事業

2021 年度 調査研究活動事業

## 福祉ってなに？

461 名の子どもたちに聞きました 調査報告書



ほ  
ほめ言葉  
近所の子にも  
声を掛け



ふ  
ふれあい  
親子の会話  
さりげなく



て  
手伝いは  
子どもの心  
育ててく

\* 「若者発”ご近所福祉かるた」(企画・制作：静岡福祉文化を考える会) より

静岡福祉文化を考える会

# 静岡福祉文化を考える会 2021年度 調査研究活動事業 福祉ってなに？ 461名の子どもたちに聞きました 調査報告書

## 【目 次】

- はじめに 子どもたちの提言を、これからの地域づくりに大人社会がいかにかけるか … p.2
  
- **第1章 調査の概要** … p.3
  - 1. 調査実施意図
  - 2. 調査方法と調査日
  - 3. 調査票の形式及び調査項目
  - 4. 調査対象と調査票の発送
  - 5. 調査実施機関
  - 6. 調査協働
  
- **第2章 サンプル構成・基本属性とクロス集計について** … p.9
  - 1. 性別
  - 2. 学年別
  - 3. 家族構成別
  - 4. 兄弟姉妹別
  - 5. クロス集計
  
- **第3章 調査結果** … p.12
  - 1. 基本属性
  - 2. 生活状況（子ども）に関すること
  - 3. 家庭・家族に関すること
  - 4. 地域社会・地域活動に関すること
  - 5. 福祉との出会いに関すること
  - 6. これからの地域の支え合いへの提言
  - 7. コロナ禍下，調査協力者からの意見
  
- **第4章 調査のまとめ** … p.43
  
- **第5章 資料編** … p.46
  - 1. 事業経過記録
  - 2. 調査実施要項
  - 3. 調査票
  - 4. 静岡福祉文化を考える会 26年の歩み
  - 5. 2021年度静岡福祉文化を考える会活動計画
  - 6. Our Life 134～137号（本会機関紙）
  - 7. 新聞掲載記事
  - 8. 静岡福祉文化を考える会要覧
  - 9. 静岡福祉文化を考える会規約
  - 10. これからの福祉を考えるネットサイト
  - ☆ 「若者発 ご近所福祉かるた ワンポイントコーナー」（関連企画）

## はじめに

### 子どもたちの提言を、これからの地域づくりに大人社会がいかに活かせるか

本会の誕生は、阪神淡路大震災（1995年1月17日）から1年後の3月30日・31日の2日間、浜松市（「浜松子ども園」、「プレスタワー」）において、全国各地から400名余の参加者を迎えて開催しました「日本福祉文化学会第11回現場セミナー」が原点です。県内外の事例を紹介し合いながら、地域性を踏まえた、地域づくりの重要性を福祉文化の視点で共有し合う「災害と福祉文化」、「働く人たちと福祉文化」、「環境と福祉文化」、「高齢者と福祉文化」、「障がい者と福祉文化」の4つの分科会と基調講演、「静岡発 みんなで語ろう 福祉文化を21世紀の礎に一人間らしい豊かさを目指して、いま文化としての福祉を語る」をテーマに議論を深め合いました。

このセミナーに係った高校生から先輩市民まで40名余がその後、静岡県内の地域性を活かし、身近な地域課題を世代や領域を超えて研究討議できる活動集団を立ち上げようと議論を深め、1996年9月に、市民活動・志縁団体として「静岡福祉文化を考える会」が誕生しました。

本会は、「地方発 福祉文化の創造」を追求し、「福祉文化」を共有化する市民活動集団、男性の積極的な参加、そして、異業種交流集団ともいえる特色を持って活動に取り組み、26年目の活動に至っています。

本会の今年度の活動は、厳しいコロナ禍で、一体どのように展開することができるだろうかと不安を持ちながらも、「専門性と市民性の融合」、「公開型地域総合型学習の企画と実践」、「課題解決に向けたプロセス重視」の3つの活動基調を基に、「第1の柱立て：啓発学習事業—静岡発 福祉文化の創造を目指し、地域総合型学習を通して、県内各地の実践活動に学ぶ」、「第2の柱立て：活動のプロセスを重視し、協働による地域づくりを検証する」、「第3の柱立て：調査研究活動を通じて、地域ニーズの把握を基に、地域づくりを提言する」この3つの柱立てにより、今日まで、一貫した展開をしています。

今年度は、「地域を家庭化する“ご近所福祉”を創る支え合いを探る」を活動テーマに掲げ、細くも継続して取り組んできました福祉文化実践活動を具体化することといたしました。昨年度の活動テーマ「つながるご近所の再構築 決め手は一体何か ご近所福祉の復活—近助とは何かを探る」による活動から浮き彫りになりました、大人社会のコミュニティへの希薄化により、子どもを取り巻く地域環境は、果たして、子どもたちに、しっかりと思いやりの心を育むことができるか、「地域の子どもの地域で育む」ことを把握しようと、子ども対象の調査「福祉ってなに？ 300名の子どもたちに聞きます」に取り組み、ここから、大人社会に向けた問題提起（提言）を明らかにしようと思いました。

本会では、これまで、調査は、大人対象中心に取り組んでまいりましたが、今回は、厳しい社会状況下の中、県内各団体、地域実践者等の皆様のご努力により、461名の子どもたちから尊い回答をいただくことができました。当初の「300名」を改め、「福祉ってなに？ 461名の子どもたちに聞きました」と明記することといたしました。

調査研究活動を実施するにあたり、「焼津福祉文化共創研究会」（焼津市港地区において住民主体に「ささえあい講座」を3年間開講し、その後2019年4月に、講座運営に関わった有志14名で立ち上げ3年目の地域活動に取り組んでいる）と「調査テーマ」を共有し、「協働」により「調査部会」を設置し、円滑に活動に取り組めるように努力してまいりました。このたび、子どもたちからの回答をもとに考察し、提言としてまとめましたこの「調査報告書」が、明日を担う子どもたちを育む地域づくりの一助になれば幸いです。

このたびの調査研究事業実施にあたりまして、公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い基金助成事業、公益財団法人あしたの日本を創る協会 政策提言助成事業の多大なご理解とご支援をいただきましたことに、心より感謝申し上げますとともに、改めて、本事業にご支援ご協力をいただきました県内の皆様方に深く感謝申し上げます。

2022（令和4）年2月26日

静岡福祉文化を考える会 代表 平田 厚

# 第1章 調査の概要

## 1. 調査実施意図

今年度で26年目の活動に取り組んできた「静岡福祉文化を考える会」は、一貫して、「専門性と市民性の融合」、「公開型地域総合型学習の企画と実践」、「課題解決に向けたプロセス重視」の3つの活動基調を基に、「第1の柱立て：啓発学習事業－静岡発 福祉文化の創造を目指し、地域総合型学習を通して、県内各地の実践活動に学ぶ」、「第2の柱立て：活動のプロセスを重視し、協働による地域づくりを検証する」、「第3の柱立て：調査研究活動を通して、地域ニーズの把握を基に、地域づくりを提言する」の3つの柱立てにより、活動を展開してきた。

特に、「調査研究活動」は、結成当初から、「静岡発 福祉文化の創造」を目指した福祉文化実践活動の重要な柱立ての一つとして、その時代の地域社会を取り巻く様々な福祉課題を「調査テーマ」として取り組み、その分析結果を、県内各方面での研修会や本会の公開型研修会などで公表し、世代を超えた「地域総合型学習」を通じて問題提起をし、県民一人ひとりの意識改革に努めてきた。

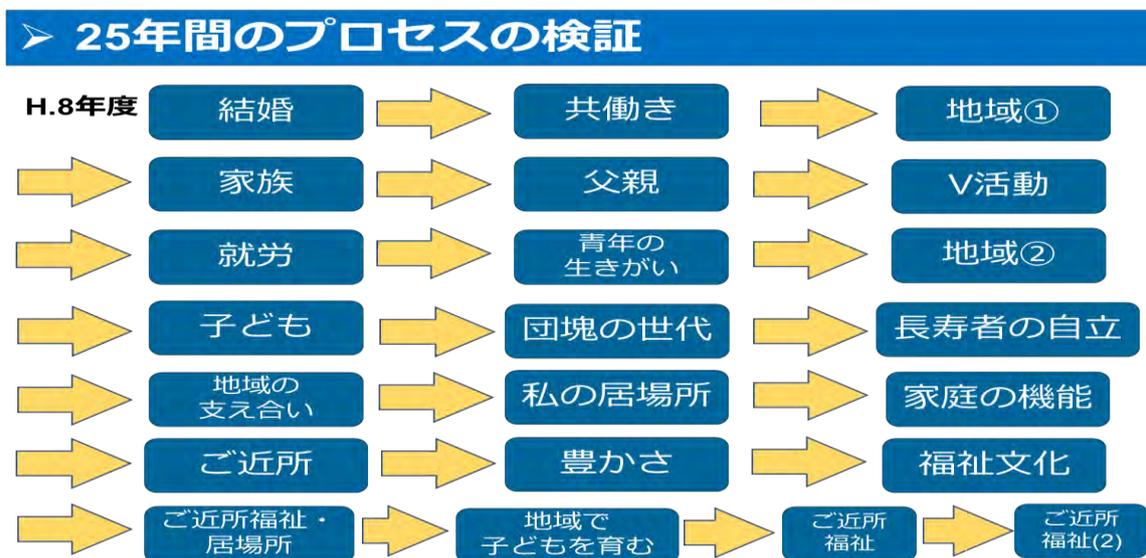
これまでの25年間の調査研究活動を振り返ってみると、

- 1997年度 1. 「共働きに関する調査」
- 1998年度 2. 「私たちにとって、地域とは何か－その1－意識と実態調査」
- 1999年度 3. 「私たちにとって、家族とは何か調査」
- 2000年度 4. 「父親に関する調査」
- 2001年度 5. 「ボランティア活動実践者意識調査」
- 2002年度 6. 「大人を対象とした生きがいと就労に関する意識調査」
- 2003年度 7. 「青少年の生きがいに関する調査」
- 2004年度 8. 「地域とは何か－その2－意識と実態調査」
- 2005年度 9. 「子どもと社会環境に関する調査」(継続調査)
- 2006年度 10. 「子どもと社会環境に関する調査」(総括)
- 2007年度 11. 「地域活動と団塊の世代の役割に関する意識調査」
- 2008年度 12. 「長寿者の生きがい、その意識と実態に関する調査」(静岡県共同募金会助成事業)
- 2008年度 13. 「日常生活と福祉情報に関する意識調査」(静岡県委託事業)
- 2009年度 14. 「長寿社会に関する県民意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 2010年度 15. 「いまこそ地域社会に福祉文化を拓く 生活圏域における支え合いとは何か本音に迫る調査」(静岡県委託事業)
- 2011年度 16. 「地域と私の居場所その意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 2012年度 17. 「家族ってなにその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 2013年度 18. 「長寿者とつながるホッとすご近所づくりその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 2014年度 19. 「豊かに暮らせる地域づくりその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 2015年度 20. 「若者の地域参加その意識と実態調査」
- 2016年度 21. 「ご近所福祉その意識と実態調査」
- 2017年度 22. 「居場所ってなにその意識と実態調査」

- 2018年度 23. 「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査」(単純集計)
- 2019年度 「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査」  
(静岡県社協ふれあい基金助成事業・考察提言)
- 24. 「256名の子どもたちに聞きました。ホッとする地域ですか?」  
(静岡県社協ふれあい基金助成事業・考察提言)
- 2020年度 25. 「ご近所福祉その意識と実態調査」

と、「25のテーマ」の調査研究活動に取り組んできた。

こうした調査研究活動の取り組みの中で、特に本会が「長寿者」に焦点を合わせて、県民の広く呼び掛けて取り組んだ時期があった。それは、平成20年度～平成26年度の7年間は、静岡県委託事業「一人でも安心して暮せる地域づくり事業」に取り組む中で、社会的に深刻な問題となった「長寿者等の孤立防止政策」であった。長寿者だけの問題ではない、社会全体の問題として取り組まなければならないと、あらゆる角度から検証し、これまでの福祉文化実践活動を関連づけながら事業を展開する、一貫したプロセス重視の視点から考察をしてきた経緯がある。



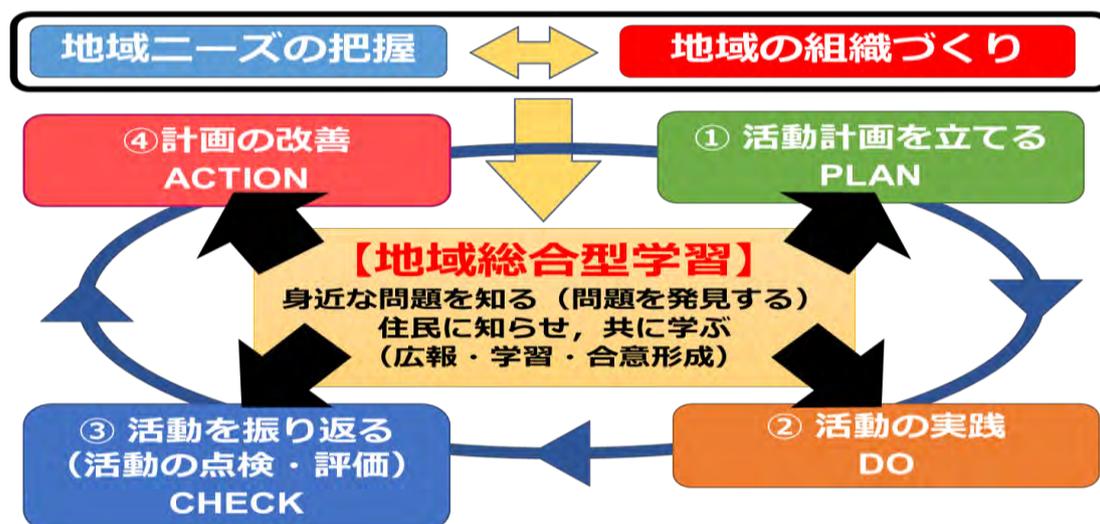
通算26回目となる2021年度の調査研究事業は、これまでの社会的課題を活動テーマにして25年間取り組んできた「共働き」、「地域」、「家族・家庭」、「父親」、「ボランティア」、「生きがい」、「若者」、「子ども」、「長寿者」、「福祉情報」、「支え合い」、「ご近所福祉」、「居場所」等その時代の数々の地域課題を把握した上で、つなぐ・支える地域社会の再構築に向けて、長引く厳しいコロナ禍で、これまでの生活圏域のご近所の支え合いから、地域住民相互のつながりや支え合いが弱くなり、地域コミュニティへの関わりについて、その意識や実態がさらに希薄化していることが、昨年度の「ご近所福祉その意識と実態調査報告書」から浮彫になった。

こうした、地域環境で生活している、次世代を担う子どもたちの「思いやりの心」が、確実に醸成されているか、大いに気になるところであった。加えて、厳しい社会環境が続く今日にあって、子どもたちの福祉に対する意識と実態はどうか、問い質す時期が来ていると考え、このたびの調査では、身近な生活圏域において、地域の大人社会と向き合う子どもたちを対象にご近所や同居する高齢者（認知症高齢者含）、障がい児者等への思いやり等について、「基本属性」、「生活状況（子ども自身）」、「家庭・家族のこと」、「地域社会・地域活動のこと」、「体験事例」、「地域への期待」の各項目の意識と実態を把握し、子どもを取り巻く地域環境の課題を改善・解決し「共

生社会」を目指して、地域社会に提言することを目的に取り組むこととした。

今年度の調査研究事業に取り組むにあたり、「焼津福祉文化共創研究会」の調査事業と関連を持たせて取り組むこととした。「焼津福祉文化共創研究会」の調査は、焼津市内管内の子どもたちを対象に、調査内容はほぼ同じ内容で実施することを確認した。

本会及び「焼津福祉文化共創研究会」は、あくまでも、住民主体を基本として、積極的に参画・協力を呼びかけ、これからの地域の課題改善・解決に向けた研究活動として、調査個票の作成検討をはじめ、調査依頼・回収、データ入力・考察等を、「調査部会」を運営し、「協働」で取り組むこととした。



## 2. 調査方法と調査日

### (1) 調査票・項目の検討

2021年4月～7月、焼津福祉文化共創研究会の中に、「調査部会」を設置して検討協議をした。また、静岡福祉文化を考える会の中に設置した「共創社会実現研究会」に外部委員を3名委嘱し、調査票に関する意見を求めた。

### (2) 調査票の完成

調査検討協議を重ねながら、「予備調査」を実施し、2021年7月17日仕上げる。

### (3) 調査依頼（実施期間）

調査時点を、2021年8月1日とし、7月25日～8月31日の夏休み期間を中心に、各地域の状況を踏まえた展開をした。

### (4) 回収・入力（単純集計）期間

「第3回IT・調査部会」（7月9日開催）より、調査データ入力に関する協議を開始し、9月1日～10月10日の間、6名のデータ入力協力会員により、データ入力作業に取り組んだ。

この間、回収・入力作業状況を見ながら、「単純集計」及び「クロス集計」作業に取り組み、10月23日の第9回調査部会において、回収データ461枚の集計結果を確認した。

### (5) 分析・考察

コロナ禍、第7回調査部会～第10回調査部会において、分析・考察方法を検討し、「各種集計表」を11月13日までに配布し考察作業を実施。その後、全体調整作業を継続させて、意見を集約し、「報告書」の編集作業に入った。

## (6) 公表・報告

データ入力作業期間中、「中間報告」の機会を設け、本会関連各種会議や、関係機関・団体等の各種研修会で経過報告し、「Our Life」（本会機関紙）で経過・概要を紹介した。

正式公表を2022（令和4）年2月26日に第3回公開型研修会において実施した。

## 3. 調査票の形式及び調査項目

(1) 調査票の形式 A3版、両面2ページ、24項目の質問

(2) 調査項目

① 基本属性	⇒	質問 1. (問 1, 2, 3, 4, 5)	5 項目
② 生活状況（子ども自身）	⇒	質問 2. 3. 4. 5.	4 項目
③ 家庭・家族に関すること	⇒	質問 6. 7. 8. 9. 10.	5 項目
④ 地域社会・地域活動に関すること	⇒	質問 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22.	12 項目
⑤ 福祉体験に関すること	⇒	質問 23.	1 項目
⑥ 地域の支え合いの提言	⇒	質問 24.	1 項目

## 4. 調査対象と調査票の配布及び回収

(1) 対 象

当初、調査対象を小学5・6年生としていたが、学校関係者や「共創社会実現研究会」等の議論を経て、小学4年生を加えた、静岡県内の小学校4年生、5年生、6年生、約300名の調査回収を目標に実施。

(2) 配布及び回収状況

本会の調査活動は、26年間、一貫して会員相互の意見とともに、焼津福祉文化共創研究会との「協働」で手作りにより実施してきた。

今回の調査は、県内地域活動実践者、各種団体、福祉施設等の全面的な協力を得て、主な依頼方法を郵送方法とした。また一部、研修会参加者への依頼及び手渡しによる対応をした。

依頼及び回収状況は下記の通りである。

	会員	市町社協	地域実践者	施設・団体	総数
依頼領域数	60	200	300	50	610
回収実績数	22	112	285	42	461
パーセンテージ	36.6%	56.0%	95.0%	84.0%	75.6%

回収状況を地区別にまとめると、

	東部地区	中部地区	西部地区	計
回収実績数	137	103	221	461
パーセンテージ	29.7%	22.3%	48.0%	100.0%

これまでの調査は、大半は、大人対象の調査であったが、今回は子ども対象の調査であるため、参考までこれまでの調査票の回収状況（率）を考察すると、

- 2016年度「ご近所福祉調査事業」（大人対象調査） … 56.1%
- 2017年度「居場所調査」（大人対象調査） … 65.8%

- 2020年度「ご近所福祉その意識と実態調査」(大人対象調査) … 71.0%
- 2021年度「福祉ってなに? 461名の子どもたちに聞きました調査」(子ども対象調査) … 75.6%
- 2018・2019年度「子どもを育む調査」(大人対象調査) … 80.1%

厳しい社会状況下であったが、昨年度を上回る調査票の回収であった。

調査に協力していただいた関係者のご支援の結果で、調査の意義は大きいと感じられた。

## 5. 調査実施機関 静岡福祉文化を考える会

これまで、調査研究活動事業は、定例委員会中心の議論であったが、今回は、焼津福祉文化共創研究会との協働により、下記の通り調査部会を設置し、進行管理体制を明らかにして円滑な運営に努めた。

月	展 開 方 法	備 考
06月	第01回(06/03) (1) 設置趣旨確認と昨年度の総括と現状確認 (2) 子ども対象調査意識と実態調査事業の基本方針 第02回(06/26) 子ども対象福祉意識と実態調査事業(調査項目)	財源確保努力
07月	第03回(07/09) 子ども対象福祉意識と実態調査事業(調査方法・配布) 第04回(07/31) 子ども対象福祉意識と実態調査事業(調査回収努力)	ブログ検証
08月	第05回(08/18) 子ども対象福祉意識と実態調査事業(調査集計・クロス①)	
09月	第06回(09/11) 子ども対象福祉意識と実態調査事業(調査集計・クロス②) 第07回(09/25) 子ども対象福祉意識と実態調査事業(調査集計・クロス③)	
10月	第08回(10/07) 子ども対象福祉意識と実態調査事業(分析作業①) 第09回(10/23) 子ども対象福祉意識と実態調査事業(分析作業②)	ブログ検証
11月	第10回(11/06) 子ども対象福祉意識と実態調査事業(報告書編集①)	
12月	第11回(12/08) 子ども対象福祉意識と実態調査事業(報告会企画)	ブログ検証
01月	第12回(01/08) 子ども対象福祉意識と実態調査事業(報告会具体化)	
02月	第13回(02/05) 子ども対象福祉意識と実態調査事業(報告会広報)	
03月	第14回(03/12) 2021年度事業総括と2022年度の方向性確認	協働の検証

## 6. 調査協働 焼津福祉文化共創研究会

### ■ 参考資料

#### 焼津福祉文化共創研究会

#### 「福祉ってなに? 244名の子どもたちに聞きました」調査実施状況概要

1. 当初「150名の子どもに聞きます」をもとに、調査に取り組むこととしたが、果たして、管内に対象小学生(小学4年生～6年生)は、何人いるのかを把握しなければならないと、学校、子ども会世話人等からの情報収集作業に取り組んだ(地域のニーズ把握)。
2. その結果、管内には、対象となる4～6年生は、280名(子ども会加入児童)を把握した。「150名」は、約50%の児童の意味合いが判明。併せて、管内の子ども会組織数の把握ができた。過去には、各町内会ごとに、子ども会組織が存在し、町内会等「地縁団体」と子ども会(「志縁団体」)は常に連携を持ちながら、活動をしていた時代があったが、今日では、管内29の町内会に、21の子ども会組織が存在する。
3. 調査対象児童だけでなく、小学児童数は638名いることも把握できた。

No.	子ども会名	校区	自治会	町内会	4年生	5年生	6年生	児童 Total	子供会 全体数
1	星の子第1子供会	小川	14	1	4	5	8	17	43
2	星の子子供会	港	14	1	6	6	7	19	57
3	第1青い鳥子供会	港	14	2,9	5	9	7	21	53
4	新青い鳥子供会	港	14	2	6	6	3	15	29
5	するが子供会	港	14	3,10	2	7	1	10	23
6	石津浜子供会	港	14	4,5,6	5	2	4	11	20
7	青空子供会	港	14	7	4	2	4	10	16
8	第1新青葉子供会	港	14	8,11	5	4	2	11	28
9	星の子第2子供会	小川	14	12	7	4	1	12	42
<b>港第14自治会関係Total</b>					<b>44</b>	<b>45</b>	<b>37</b>	<b>126</b>	<b>311</b>
10	第1若竹子供会	港	23		9	11	6	26	62
11	第2若竹子供会	港	23		5	2	1	8	18
12	第3若竹子供会	港	23		3	0	3	6	13
13	第5若竹子供会	港	23		5	1	3	9	16
14	第6若竹子供会	港	23		3	6	8	17	36
15	第1仲よし子供会	港	23		0	4	1	5	19
16	第2仲よし子供会	港	23		7	6	3	16	39
17	第3仲よし子供会	港	23		7	5	2	14	26
18	第1さざ波子供会	港	23		4	9	6	19	33
19	第2さざ波子供会	港	23		6	2	4	12	28
20	第1砂浜子供会	港	23		6	5	5	16	22
21	第10砂浜子供会	港	23		3	3	0	6	15
<b>港第23自治会関係Total</b>					<b>58</b>	<b>54</b>	<b>42</b>	<b>154</b>	<b>327</b>
<b>港地域づくり推進会管内Total</b>					<b>102</b>	<b>99</b>	<b>79</b>	<b>280</b>	<b>638</b>

#### 4. 調査対象児童への調査票の配布及び回収

##### (1) 配布方法

調査の実施にあたり、管内関係方面への協力依頼の必要性から、「港地域づくり推進會会長」、「管内2つの自治会（港第14・23自治会）会長」、「管内29の町内会長」、「管内2つの小学校校長及びPTA・子ども会会長」、「管内21の各子ども会世話人」、「湊地区民生委員児童委員協議会（24名）」、「管内3つのスポーツ少年団」、「本会会員」等60箇所513枚の調査票を配布した。調査票の配布期間中に、それぞれの各自治会内の町内会長会議において、各子ども会世話人との連携のもと、調査の協力をお願いした。また、個々に子ども会世話人、スポーツ少年団宛てに、調査の依頼文書を送付した。会員による、管内の対象家庭の訪問を通じて、協力も働きかけた。

##### (2) 回収状況

7月25日～9月20日までを調査回収期間とし、管内の地域性をもって回収に努めた。会員の戸別訪問による回収、学校側のご理解をいただき、会員による児童登校時の校門における回収作業、各自治会の町内会長会議における回収呼びかけ、各子ども会世話人宅訪問の回収、各子ども会世話人主体の回収等、様々な取り組みにより、対象児童280名に対して、244名（87%の回収率）から尊い回答が寄せられた。配布作業、回収作業の一連の取り組みから、改めて「協働の重要性」、「焼津福祉文化共創研究会」を理解していただくための努力が必要であること、その上に立って、地域活動の必要性を共通理解できる環境づくりが求められることを認識した。



### 3. 家族構成別

家族についての回答結果では、

- (1) おじいちゃんやおばあちゃんと一緒に暮らしている … 120名 (26%)
- (2) 親と子どもだけで暮らしている … 333名 (73%)
- (3) その他 … 6名 (1%)

\* ここでは、2名回答不明となっている。

\* 親と子どもだけで暮らしている回答が333名(73%)と多い中で、おじいちゃんおばあちゃんと一緒に暮らしている120名(26%)の核家族傾向の生活環境が伺えた。こうした生活環境から、子どもたちの思いやりの心がどのように育まれているのかを考察できる。現在の社会環境から、祖父母の存在をもとに、祖父母との同居の子どもの福祉観を考察することができる。

### 4. 兄弟姉妹別

「あなたは、あなたを含めて、兄弟姉妹は何人ですか?」の回答では、

- (1) 1人…57名 (13%)
- (2) 2人…228名 (50%)
- (3) 3人…148名 (33%)
- (4) 4人以上…22名 (5%)

\* ここでは、6名回答不明となっている。

\* 兄弟姉妹の回答では、一番多い回答は「2人」(50%)、二番目に多い回答は、「3人」(33%)、次に「1人」(13%)、「4人以上」(5%)の回答結果であった。

\* 家族別構成とともに、兄弟姉妹の関係は、家庭・家族関係及び地域との関係でどのような状況が浮き彫りになるかを考察できる。

### 5. 「福祉ってなに? 461名の子どもたちに聞きました」調査項目とクロス集計

このたびの調査実施にあたり、調査部会では、単純集計結果が出た時点で、今後の調査分析をするにあたり、「24の質問項目」をもとに、基本属性とどのようなクロス集計が必要か議論を深めた。その結果は次の通りである。

設問No.	基本属性					
	グラフ化	1性別	2学年	3地区	4家族構成	5兄弟姉妹
1						
2		●	●			
3	●	●				●
4	●	●	●		●	
5		●	●			
6	●	●	●		●	
7		●				
8		●				
9	●	●	●		●	●
10		●			●	
11		●	●			
12		●	●		●	
13	●	●	●		●	
14		●	●		●	●
15		●				
16	●	●				
17		●				
18	●	●	●		●	●
19	●	●	●		●	
20		●	●			
21	●	●			●	
22		●	●			
23	●	●	●		●	
24						

1. 学年, 2. 男女別, 3. 内容の多い順に

## 【本会と協働 志縁団体「焼津福祉文化共創研究会」とは?】

平成 28 年度～平成 30 年度まで 3 年間にわたり、いかに、「共助・近助の地域を再構築することができるか」を目的に住民主体の企画運営により、「港地域ささえあい講座」(港第 14・23 自治会による組織体・港地域づくり推進会主催)を開講。

市民主体で取り組んだ、尊い実践講座の 3 年間の取り組みの総括から、次の 10 の地域課題を浮き彫りにした。

- (1) 語れる地域環境の醸成 (世代を超えた地域総合型学習形態の仕組みづくり)
- (2) 「地縁組織」(お互い様)と「志縁組織」(使命感)の融合による地域づくりの取り組み
- (3) 「専門性」と「市民性」の融合 (管内福祉施設連絡会とのネットワーク化と介護力 UP)
- (4) 当事者組織化の支援
- (5) 具体的な地域の生活支援策の把握
- (6) 管内のささえあいの仕組みづくり
- (7) 総合型地域支援組織の再構築 (トータルコーディネート機能)
- (8) 地域を「見える化」する広報啓発
- (9) 制度施策を理解する地域福祉教育環境の醸成
- (10) ご近所福祉の復活

その後、この講座運営に関わった実行委員有志と地域活動に関心を持つ市民 (当時 14 名) がこれまでの講座の成果をさらに地域づくりに生かそうと、「志縁団体」として 2019 年 4 月「焼津福祉文化共創研究会」(福文共)が誕生した。

こうした課題改善・解決に向けて、市民有志で結成した本会の活動が 3 年目に入る。

### ➤ 1 年目 (2019 年度)

- ◆ 活動テーマ:「港地域の“ご近所”を切り拓く 集まる居場所で地域ぐるみの支え合いを検証する」  
約 5,000 世帯で組織されている「港地域づくり推進会」(港第 14・23 自治会)管内において、「集める居場所から集まる居場所」を課題提起。

### ➤ 2 年目 (2020 年度)

- ◆ 活動テーマ:「港地域の極印所福祉を切り拓くパート 2-協働による地域課題解決を探る-」  
「ご近所福祉その意識と実態調査」に取り組み、地域で顔の見える“近助”の関係づくりができる「協働による地域づくり」。

### ➤ 3 年目 (2021 年度)

- ◆ 活動テーマ:「港地域をつなぐ・ささえあう“ご近所福祉”を創る」  
「福祉ってなに? 244 名の子どもたちに聞きました」調査活動に取り組む。

4 月から毎月定例会を開き、活動の議論をし、調査部会を月に 2 回開き、活動を進めています。多くの方々に調査にご協力いただき、予想を上回る回収率となりました。



## 第3章 調査結果

第3章では、「福祉ってなに? 461名の子どもたちに聞きました」調査について、24の質問項目の調査票により、静岡県域の小学4年生～6年生の461名の児童から回答をいただいた。

静岡県域における調査は、次の関係領域を通して、子どもたちに調査をお願いしていただいた。

会員(22枚/60枚)、市町社会福祉協議会(461枚/610枚)で、回答率75.6%である。

この回答データを「焼津福祉文化共創研究会」内に設置した調査部会のメンバーを中心に、単純集計と、基本属性に基づくクロス集計を実施して、第2章 サンプル・基本属性をもとに、24の質問項目の調査結果を次の6つの領域に分けて考察した。

### (1) 基本属性(質問1. 問01.～05.)

- ①「性別」 ②「学年別」 ③「地域別」 ④「家族構成別」 ⑤「兄弟姉妹別」

### (2) 生活状況(子ども)に関すること(質問2.～質問5.)

- ① あなたは、友達と遊びますか。  
② あなたは、お手伝いをしますか。  
③ あなたは、自分のことで困ったときは、主に誰に相談しますか。  
④ あなたは、友達が困っていたり、悩んでいたりしたらどうしますか。

### (3) 家庭・家族に関すること(質問6.～質問10.)

- ① あなたは、家族と話をしますか。  
② 家族と、どんな時に話をしますか。  
③ 家族と、話をしない理由は何ですか。  
④ あなたは、家族の人にほめられますか。  
⑤ あなたは、毎日家族と楽しく過ごしていますか。

### (4) 地域社会・地域活動に関すること(質問11.～質問22.)

- ① あなたは、地域でどのようなことに心がけていますか。  
② あなたは、すすんで他人のためになにかをしてみたいと思いますか。  
③ あなたは、近所の人とよく話をしますか。  
④ あなたは、地域で行うイベントにはよく参加しますか。  
⑤ あなたが住んでいる地域は、とても良い地域だと思いますか。  
⑥ あなたが住んでいる地域の良いところはどこですか。  
⑦ あなたの住んでいる地域の良くないところはどこですか。  
⑧ あなたは、地域の行事参加の呼びかけがあれば参加しますか。  
⑨ あなたは、地域の人にほめられたことがありますか。  
⑩ あなたは、「赤い羽根共同募金」のことを知っていますか。  
⑪ あなたは、日常生活の情報はどこから得ていますか。  
⑫ あなたは、毎日の生活の中で、楽しい場所はどこですか。

### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー①】

この「ワンポイントコーナー」では、本会が、「2015年度赤い羽根共同募金助成事業」により、若者の意見をもとにご近所のささえあいを学ぶ住民福祉教育教材として製作した「若者発 ご近所福祉かるた」を紹介します。

絵札(漫画家 法月理栄様作画)、読み札(若者が長寿者から学んだご近所を表現)に「解説」を加えました。それぞれのキーワードは、強調して表現しています。今年度取り組みました「福祉ってなに? 461名の子どもたちに聞きました調査報告書」に問題提起しましたこれからの課題解決に、参考にしてください。

2021年度「若者発 ご近所福祉かるた利用の手引き」を新たに作成しましたので、併せて活用してください。問い合わせは本会事務局まで。



(5) 福祉との出会い（ふれあい交流）に関すること（質問 23.）

① あなたは、高齢者や障害のある人とのふれあい交流をしたことがありますか。

(6) これからの地域の支え合いへの提言（質問 24.）

① あなたにとって、「安心して、みんなで楽しく暮らせる地域」とは、どんな地域ですか。

## 1. 基本属性（質問 1. 問 01. ～問 05.）

ここでは、質問 1.の問 01.～問 05.の「基本属性」についてまとめた。

				行計	項合計	項目内比
質問1	問01	性別	男性	①	216	47%
			女性	②	244	53%
	問02	学年	4年生	①	153	33%
			5年生	②	141	31%
			6年生	③	165	36%
	問03	住まいの地域	東部	①	138	30%
			中部	②	104	23%
			西部	③	219	48%
	問04	家族について	おじいちゃんやおばあちゃんと一緒に暮している	①	120	26%
			親子のみ	②	333	73%
			その他	③	6	1%
	問05	何人兄弟姉妹	1人	①	57	13%
			2人	②	228	50%
			3人	③	148	33%
			4人以上	④	22	5%

(1) 性別について

\* 偶然にも、性別では、男性 216 名（47%）、女性 244 名（53%）とほぼ同じ回答結果。

(2) 学年別

\* 回答結果を見ると、6年生 165 名（36%）、次に4年生 153 名（33%）、5年生 141 名（31%）の順であった。回答状況はほぼ同じ割合となっている。

\* 調査回答対象学年を、当初 5・6 年生と検討していたが、教育関係者の意見を踏まえて 4 年生を加える調査となった。幅広く年代別考察ができる状況である。

(3) 地域別

\* 「西部地区」219 名（47%）、「東部地区」138 名（30%）、「中部地区」104 名（23%）の回答順であった。これまで、西部地区からの回答が少ない傾向であったため、今回は、調査依頼を積極的に働きかけた結果である。

\* 中・東部地区は、いつもの働きかけより少ない状況となった。

(4) 家族構成別

\* 回答順では、「親と子どもだけで暮らしている」333 名（73%）、「おじいちゃんやおばあちゃんと一緒に暮らしている」120 名（26%）、その他 6 名（1%）。

\* 核家族傾向の生活環境は、子どもたちの思いやりの心がどのように育まれているかである。

\* 現在の社会環境から、祖父母の存在を把握することができる。

### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー②】

【解説】

おすそ分けは物だけではありません。心を添えた「おすそ分け」の復活を。対等で見返りを求めず、何時までも続く信頼関係。



\* 回答結果では、2人228名(50%)、3人148名(33%)、1人57名(13%)、4人以上22名(5%)で、2人が50%を占めている。1人13%と比較的少ない回答状況。

## 2. 生活状況（子ども）に関すること（質問2.～質問5.の4問）

### 質問2. あなたは、友だちと遊びますか。

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問2	よく遊ぶ	104 48%	112 46%	216 47%
	あなたは、友だち	85 40%	93 43%	178 39%
	ときどき遊ぶ	21 10%	31 14%	52 11%
	あまり遊ばない	5 2%	5 2%	10 2%
	全く遊ばない			
小計		215	241	456

今回、子どもを取り巻く社会環境（親の都合、神殿の生活基盤の固定化・塾・習い事等）により、子どもの日常的な行動や子ども同士の関係づくりも制約を受けていることが伺える。

「友だちと遊ぶ」傾向は、全体で約86%である。男性88%、女性89%は、ほぼ同じである。「友だちと遊ばない」傾向は、全体で13%。男性12%に対して、女性は16%とやや高い。

### 質問3. あなたはお手伝いをしますか。

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問3	よくする	55 25%	70 29%	125 27%
	あなたは、お手伝	94 43%	114 47%	208 45%
	いをしますか。	59 27%	53 22%	112 24%
	あまりしない	10 5%	6 2%	16 3%
	しない			
小計		218	243	461

この質問3の「あなたはお手伝いをしますか。」は、子どもの家事労働が、身近な地域社会において、積極的な社会参加につながるかを考察するために設けた質問である。

「お手伝い」は、全く個人の自発的な側面と、社会生活から学び取った側面と、家庭環境において役割分担化されている側面（大人社会における共働き・経済的側面）があることの認識が伺える。

そうした中で、回答結果を見ると、全体的な傾向として、「よく手伝いをする」27%、「ときどき手伝いをする」45%で、「手伝いをする」傾向は72%と高い回答である。

「あまり手伝いをしない」24%、「手伝いをしない」3%と、「手伝いをしない」傾向は27%。

家庭内における手伝いの位置づけは、子どもの役割分担を提示して、生活の中でルール化し、日常的な位置づけの工夫も課題の一つと考えられる。

「手伝いをする」傾向は、男性68%に対して、女性76%と、約8ポイント女性の方が積極的である回答結果であることから、男性の家庭環境における「手伝い」の生活ルール化の中での位置づけにより、さらに、自発性が培われることを期待したい。

### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー③】

#### 【解説】

今、世代を超えた地域づくりに欠かせない「居るだけのボランティア」若者も長寿者も地域に姿を見せているだけで心がホックリ。



		人数 4年生	人数 5年生	人数 6年生
質問3	よくする	41 26%	36 26%	47 28%
	あなたは、お手伝い	76 49%	61 44%	72 44%
	をしますか。 ときどきする	34 22%	41 29%	37 22%
	あまりしない	4 3%	2 1%	9 5%
	しない			
小計		155	140	165

これを学年別（年代別）結果で見ると、「手伝いをする」4年生75%、6年生72%、5年生70%の順で、4年生が積極的であり、その次に6年生、5年生の順である。

		人数 祖父母同居	人数 親子のみ	人数 その他
質問3	よくする	34 28%	88 26%	3 50%
	あなたは、お手伝い	54 45%	151 45%	3 50%
	をしますか。 ときどきする	30 25%	82 25%	0 0%
	あまりしない	2 2%	13 4%	0 0%
	しない			
小計		120	334	6

「家族構成別」結果では、「手伝いをする」傾向結果では、回答の多い順に、祖父母同居73%、親子のみ71%で「手伝いをする」傾向は、あまり大きな変化はない。この回答結果から見ると、家庭環境における、日常的な生活の中では、それぞれの家族構成の中で、ある程度、「手伝い」の位置づけが明確化しているようにも伺える。

		人数 1人	人数 2人	人数 3人	人数 4人以上
質問3	よくする	16 29%	54 24%	47 32%	5 22%
	あなたは、お手伝い	29 52%	98 43%	65 44%	15 65%
	をしますか。 ときどきする	8 14%	70 31%	32 21%	1 4%
	あまりしない	3 5%	6 3%	5 3%	2 9%
	しない				
小計		56	228	149	23

「あなたは、手伝いをしますか。」の質問を、兄弟姉妹別の結果から見ると、「手伝いをする」傾向の多い順に見ると、4人以上87%、1人81%、2人67%となっている。意外と、4人以上では、手伝いをする環境ができていのように感じられる。1人は、家庭環境における、日常的な手伝いの位置づけがあるように伺える。

質問3.において、「よく手伝いをする」、「ときどき手伝いをする」の回答の子どもに、具体的な手伝いの内容の自由回答内容を、本会で、キーワードで整理した結果は下記のグラフである。

回答の多い内容順に見ると、「掃除（風呂・玄関・トイレ・リビング）」24%、「洗濯物（干す・取り込む・たたむ）」23%、「食事の支度（料理・盛り付け・箸を並べる・テーブル拭き）」22%、「食器洗い・片付け」15%、「ゴミだし」3%、「部屋の片づけ」、「靴の整理」、「弟・妹の世話」、「布団の上げ下げ」各2%、「ペットの世話」、「買い物」、「水やり」各1%。日常生活（平日）では、手伝いの範囲は、子どもの生活日課の中である程度ルール化した方向性が見られる。

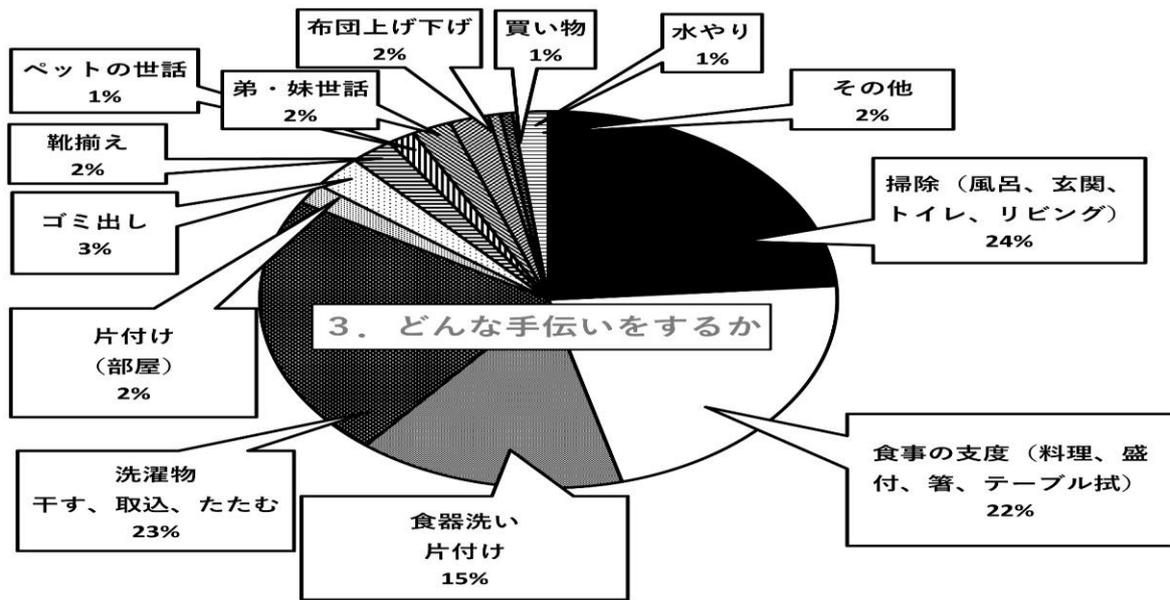
この項目を、さらに休・祝日等に分けた考察の場合では、自由な時間帯の中で、手伝いの内容は幅広いものか予想できる。いずれにせよ、家庭内における生活環境を整え、地域社会との接点を維持しながら、自発的、協調的、社会的行動につながり、積極的に地域参加の行動につながる心がけを期待したいものである。

### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー④】

#### 【解説】

見知らぬ人でも、すれ違った時には軽く会釈をしたいものです。それだけで「他者との関係づくり」そこから信頼関係が生まれてきます。





質問4. あなたは、自分のことでこまった時は、主に誰に相談しますか。

質問4	人数	性別		人数	割合	人数	割合
		男性	女性				
友だち	70	16%	120	24%	190	20%	
あなたは、自分のことでこまったときは主に、だれに話したり相談したりしますか。主なものを3つまで答えて下さい。	73	17%	63	13%	136	15%	
母親	156	37%	173	34%	329	35%	
学校の先生	44	10%	44	9%	88	9%	
おじいちゃん・おばあちゃん	20	5%	19	4%	39	4%	
親戚	2	0%	4	1%	6	1%	
兄弟姉妹	22	5%	43	9%	65	7%	
その他の人	2	0%	0	0%	2	0%	
誰にも相談しない	11	3%	14	3%	25	3%	
こまっていない	26	6%	22	4%	48	5%	
小計	426		502		928		

全体の回答結果で回答の多い順に「母親」35%、「友だち」20%、「父親」15%、「兄弟姉妹」7%、「学校の先生」9%、「祖父母」4%、「困っていない」5%、「誰にも相談しない」3%、「親戚」1%、「その他の人（学童保育職員・病院の先生）」1%。相談範囲の解釈が幅広い中で、「友だち」20%が目立つ。日常生活環境の範囲内の子ども基準の回答結果と受け止めることができる。生活全般における広い相談として、「母親」35%が一番多く、それに対して「父親」15%の存在がやや薄い。「兄弟姉妹」7%、「祖父母」4%は、家庭・家族のつながりの中の回答と伺える。「学校の先生」9%は、子どもたちの生活での問題解決上、大きな存在意義が感じられる。

【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑤】

【解説】

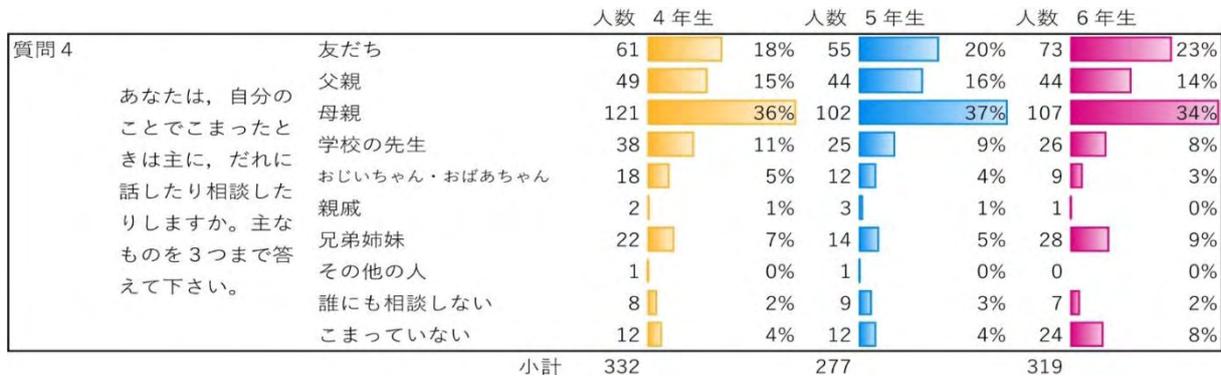
一人より二人，二人よりみんなだと続くようです。「健康づくり」はご近所さん同士で「地域の輪」づくり。



「困っていない」3%は、家庭環境などが整い、相談は、日常生活の中で常に解消している側面が伺える。

「誰にも相談しない」3%の結果を、大人社会は常にしっかりと生活の中で受け止め、家庭内に語れる環境をつくる心がけとともに、発達段階に応じた問題解決方法を考えていきたい。

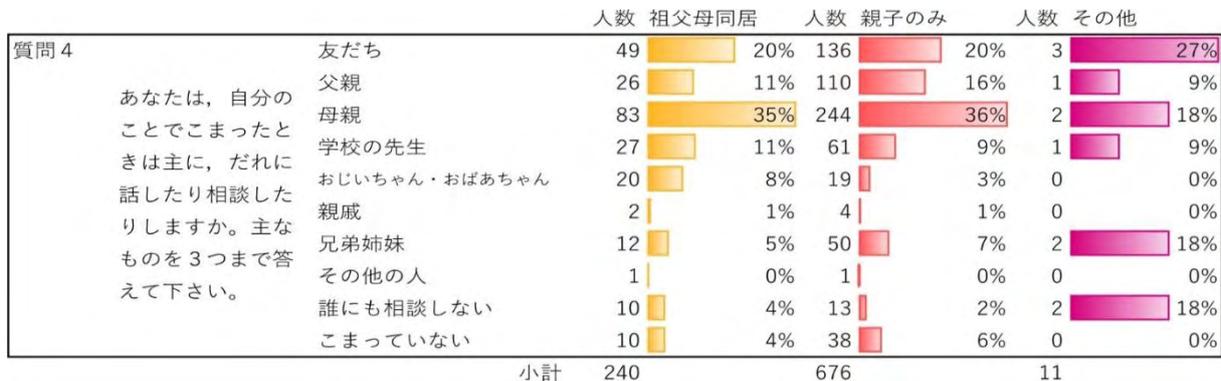
「その他の人」に大学生、幼稚園先生あり。



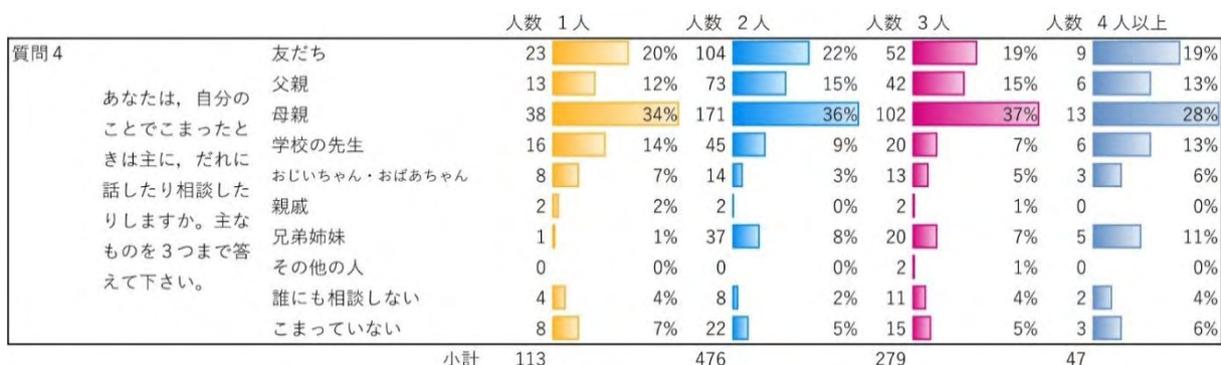
学年別（年代別）で見ると、4年生では、「母親」36%、「友だち」18%、「父親」15%、「学校の先生」11%、「兄弟姉妹」7%、「祖父母」5%、「困っていない」4%、「誰にも相談しない」2%、「親戚」1%。

5年生では、「母親」37%、「友だち」20%、「父親」16%、「学校の先生」9%、「兄弟姉妹」5%、「祖父母」4%、「困っていない」4%、「誰にも相談しない」3%、「親戚」1%。6年生では、「母親」34%、「友だち」23%、「父親」14%、「兄弟姉妹」9%、「学校の先生」8%、「祖父母」3%、「困っていない」8%、「誰にも相談しない」2%、「親戚」0%。「友達に相談」は、6年生が一番多く、5年生、4年生の順となっている。母親への依存は5年生が多く、4年生、6年生となっている。父親へは、5年生は多く、4年生、6年生の順である。

「学校の先生」は、4年生が多く、5年生、6年生の順となっている。



家族構成別の結果からは、「祖父母」への相談が多くなり、父親への相談は減少傾向。兄弟姉妹への相談は、親子別の方が、祖父母同居別よりも相談は多い傾向。友達への相談は同じ割合である。



兄弟姉妹別でみると、1人では、「母親」、「友だち」、「学校の先生」、「父親」、「祖父母」の順。2人、3人、4人以上では、「母親」、「友達」、「父親」、「学校の先生」、「兄弟姉妹」、「祖父母」の順となっている。

「母親」への相談は、3人が一番多く、次に2人、1人、4人以上の順。「友だち」では、多い順に、2人、1人、3人、「父親」への相談は、2人、3人、4人以上、1人の順。

この質問項目では、日頃から、家庭環境の中で、語れる環境を創る工夫の中で、「コミュニケーション能力の助長」を常に生活の中で工夫していきたい。

### 質問5. あなたは、友だちが困っていたり、悩んでいたらどうしますか。

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問5 あなたは、友だちが困っていたり、悩んでいたらどうしますか。	話を聞く	159 74%	202 83%	361 79%
	別の友だちや大人などに相談する	25 12%	13 5%	38 8%
	何もしない	7 3%	6 2%	13 3%
	その他	0 0%	0 0%	0 0%
	わからない	24 11%	23 9%	47 10%
小計		215	244	459

全体的には、「話を聞く」が79%と回答が多く、話し合える環境であることが伺える。こうした「語れる環境」を常に維持できる地域環境を、大人社会は日常的に努力していきたい。

男女別回答では、女性が「話を聞く」83%と高く、男性の74%を9ポイント上回っている。

この質問項目でも、女性の積極的関わりが伺える。また、「わからない」は、男性11%、女性9%と、2ポイント上回っている。日頃から、関係づくりを維持しながら、問題解決の在り方を、地域全体で学び合う地域環境をつくることに努めることが求められる。

		人数 4年生	人数 5年生	人数 6年生
質問5 あなたは、友だちが困っていたり、悩んでいたらどうしますか。	話を聞く	121 80%	104 74%	136 82%
	別の友だちや大人などに相談する	10 7%	13 9%	15 9%
	何もしない	5 3%	6 4%	1 1%
	その他	0 0%	0 0%	0 0%
	わからない	16 11%	18 13%	13 8%
小計		152	141	165

学年別にみると、「話を聞く」は、6年生82%、4年生80%、5年生74%の順。「わからない」は、5年生13%、4年生11%、6年生8%。

		人数 1人	人数 2人	人数 3人	人数 4人以上
質問5 あなたは、友だちが困っていたり、悩んでいたらどうしますか。	話を聞く	45 79%	178 78%	121 82%	14 64%
	別の友だちや大人などに相談する	6 11%	14 6%	13 9%	4 18%
	何もしない	1 2%	7 3%	3 2%	2 9%
	その他	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%
	わからない	5 9%	28 12%	11 7%	2 9%
小計		57	227	148	22

兄弟姉妹別では、「話を聞く」は、3人82%、1人79%、4人以上64%となっている。

### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑥】

#### 【解説】

悩みを話せるご近所さんがいると問題解決が可能です。体験を語り合うことで「子育て支援」。



## 【子どもの生活状況から“福祉ってなに?”を読み取る】

ここでは、4つの質問項目「遊び」、「手伝い」、「自分の悩み事の解決方法」、「友達の悩みへの対応」をそれぞれの生活領域から「福祉」を考察した。

1. 子どもの日常生活は、今日では、生活基盤の固定化・塾・習い事や、親の就労等により、取り巻く社会環境は大きく変化している。子ども自身の選択肢により、自由にのびのびと自発的に行動し、子ども同士の関係づくりの基盤は薄れ、学年が上がるとともに少しずつ制約されていることが伺える。
2. 家庭環境の中で、子どもの「手伝い」の選択肢は、明確な役割分担を持ち責任感を促し、社会に向けて自発的な行動に移行ができるよう、大人社会が工夫していくことが期待される。
3. 子ども自身の悩みをどのように、日常生活の中で、解決していくことができるかは、身近な大人社会が常に歩み寄る配慮が求められる。特に、回答内容から、「父親の存在」が薄く感じられる。家族機能の中で、父親の存在を改めて確立していきたい。
4. 発達段階に応じた、友だち関係や家族関係のつながりにより、協調性を養い、思いやる心を醸成する中で、自ら問題解決方法が切り拓かれていくことを期待したい。
5. 回答結果から、協調的・心構えで、友だちの相談に応じようと歩み寄る優しさが読み取れる。いつでも語れる環境を創り出す日頃の努力をする中で、大人社会がコミュニケーションのサポートを積極的に心がけていきたい。回答結果から、特に、男性への積極的な関わりを心がけていきたい。

### 3. 家庭・家族に関すること（質問 6. ～質問 10. の 5 問）

#### 質問6. あなたは、家族と話をしますか。

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問6 あなたは家族と話をしますか。	よく話をする	170 79%	203 84%	373 81%
	たまに話をする	42 19%	35 14%	77 17%
	ほとんど話をしない	4 2%	4 2%	8 2%
小計		216	242	458

家族との会話は、全体的な回答結果から、「よく話をする」81%、「たまに話をする」17%と、「話をしない」傾向の回答が98%と、語り合う環境にあるが、「たまに話をする」17%から、家庭家族環境では、大人社会の歩み寄りが必要と感じられる。男女別では、「よく話をする」男性79%に対して、女性84%と、女性の方が積極的である。

		人数 4年生	人数 5年生	人数 6年生
質問6 あなたは家族と話をしますか。	よく話をする	133 87%	110 79%	131 80%
	たまに話をする	19 12%	28 20%	30 18%
	ほとんど話をしない	1 1%	2 1%	3 2%
小計		153	140	164

### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑦】

#### 【解説】

大災害で実証されたように、「隣人」は頼りになります。普段から「隣組」との関わりをもったお付き合いを心掛けましょう。



全体的には、「家族と話す」傾向は、4年生・5年生 99%、6年生 98%と、ほぼ家族間のコミュニケーションはとれている。

		人数	祖父母同居	人数	親子のみ	人数	その他
質問6	あなたは家族とよく話をする	99	83%	270	82%	5	83%
	あなたは家族とたまに話をする	19	16%	56	17%	1	17%
	あなたは家族とほとんど話をしない	2	2%	5	2%	0	0%
小計		120		331		6	

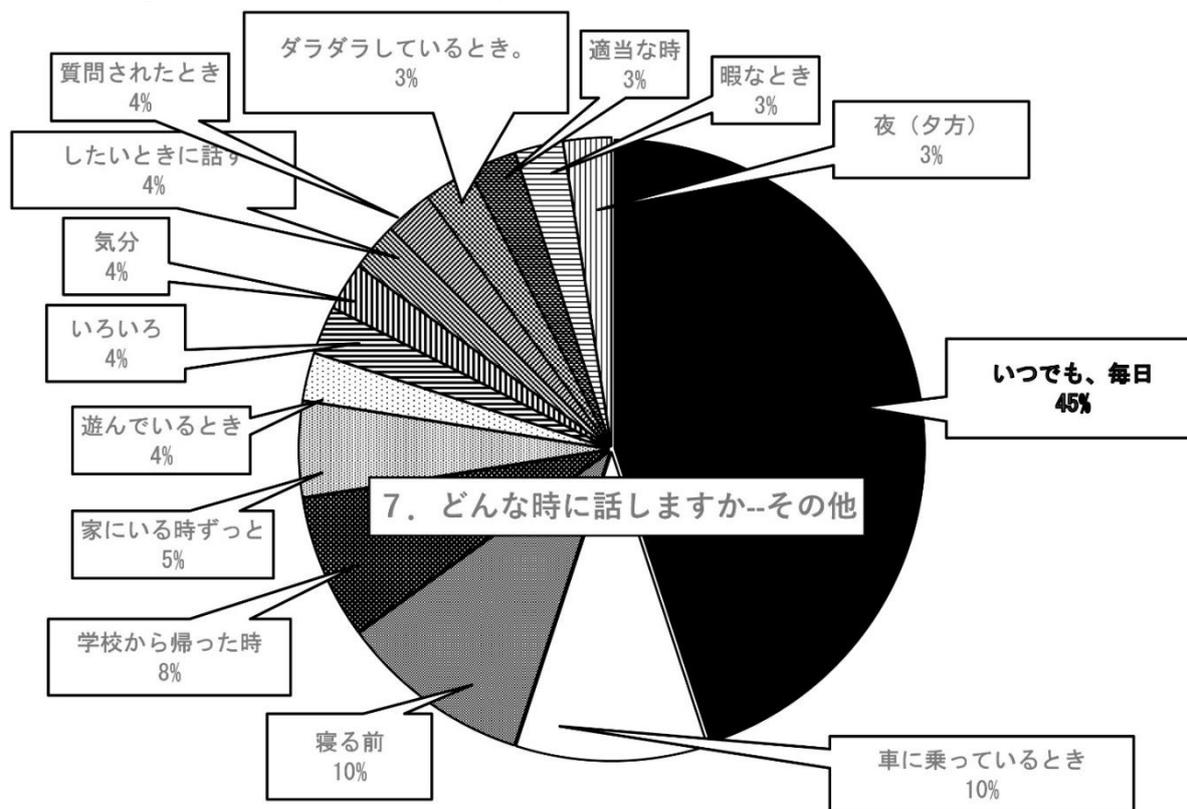
家族構成別では、全体的な「家族と話す」傾向は、「祖父母同居」、「親子のみ」99%と同じである。「よく話す」結果では、「祖父母同居」がわずかに、「親子のみ」より、話せる環境である。

### 質問7. 家族にどんな時に話をしますか。

「家族と話す」、「たまに話す」回答者から、どんなときに話をするのか問い質すと、全体的な回答結果としては、「食事をしている時」が35%と多く、「土日や祝日等学校が休みの時」24%、「みんなでテレビを観ている時」18%、「家族で外出・旅行をしている時」12%、「一緒にお風呂に入っている時」7%、「その他」4%。

		人数	男性	人数	女性	人数	全体
質問7	質問6.で「①よく話をする」「②たまに話をする」に○をつけた人に聞きます。どんな時に話をしますか。	124	27%	125	22%	249	24%
	土日や祝日等学校が休みの時	156	34%	205	36%	361	35%
	食事をしている時	34	7%	43	8%	77	7%
	一緒にお風呂に入っている時	80	17%	100	18%	180	18%
	みんなでテレビを観ている時	46	10%	73	13%	119	12%
	家族で外出・旅行をしている時	22	5%	19	3%	41	4%
	その他						
小計		462		565		1027	

「その他」4% (41名) の回答内容が、下記のグラフである。



## 質問8. 家族と話をしない理由は何ですか。

「家族とほとんど話をしない」2% (8名) の回答者からの理由は、「話したくない」33% (3名), 「何を話してよいのかわからない」33% (3名), 「学校の勉強が忙しくて」11% (1名), 「習い事が忙しくて」11% (1名) となった。

少数ではあるが、常に、家庭家族環境では、大人社会が積極的な働きかけとともに、子どもたちが自由に語れる環境づくりに心がけたい。

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問8	質問6. で「③話を	1	0	1
	しない」に○をつけ	1	2	3
	た人に聞きます。主	2	1	3
	なものを3つまで答	1	0	1
	えて下さい。	0	1	1
	学校勉強が忙しくて家族と話す時	20%	0%	11%
	話したくない	20%	50%	33%
	何を話していいかわからない	40%	25%	33%
	習いごとが忙しくて話す時間が無い	20%	0%	11%
	その他	0%	25%	11%
	小計	5	4	9

## 質問9. あなたは、家族の人にほめられますか。

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問9	あなたは、家族の	55	87	142
	人にほめられます	107	120	227
	か。	53	36	89
	よくほめられる	26%	36%	31%
	ときどきほめられる	50%	49%	50%
	あまりほめられたことが無い	25%	15%	19%
	小計	215	243	458

家族の温かい環境から、子どもは大きく心身共に成長すると感じられる。

日頃の家庭生活の中で常に声をかけること、自発性を促す上では、小さな出来事でも、機会を見つけて「褒める」ことに心がけたい。男性の76%に対して、女性85%と、女性の方が褒められる傾向が強い。

今回の回答から、全体的な結果として「よくほめられる」31%、「ときどきほめられる」50%と、約81%は恵まれた家庭環境にあると受け止められる。しかし、「あまりほめられたことがない」19%は、さらに大人社会が「ありがとう」のほめる環境を創る努力が求められる。

こうした状況では、質より多くの場を設定していきたいものである。また、小さな出来事に目を配り、安心感を持たせ、楽しい生活を生み出す心がけを子どもに投げかけていく大人社会のゆとりを生み出したい。

		人数 4年生	人数 5年生	人数 6年生
質問9	あなたは、家族の	50	50	43
	人にほめられます	77	58	91
	か。	25	32	31
	よくほめられる	33%	36%	26%
	ときどきほめられる	51%	41%	55%
	あまりほめられたことが無い	16%	23%	19%
	小計	152	140	165

学年別(年齢別)に考察した結果、「ほめられる」傾向は、4年生は84%、6年生は81%、であるが、5年生は77%と低い回答である。また、「あまりほめられたことがない」回答でも、5年生23%、6年生19%、4年生16%。

### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑧】

#### 【解説】

リーダー(町内会長・民生委員等)にだけおまかせでは本当の地域づくりではありません。住民参画で「地域づくり」を。



		人数	祖父母同居	人数	親子のみ	人数	その他
質問9	あなたは、家族のよくほめられる	38	32%	102	31%	3	50%
	人にほめられます	62	52%	163	49%	1	17%
	か。						
	あまりほめられたことが無い	19	16%	67	20%	2	33%
小計		119		332		6	

家族構成別では、「ほめられる」傾向は、祖父母同居 84%，親子のみは 80%とわずかではあるが、祖父母同居が、ほめられる場を有している家庭環境にある。

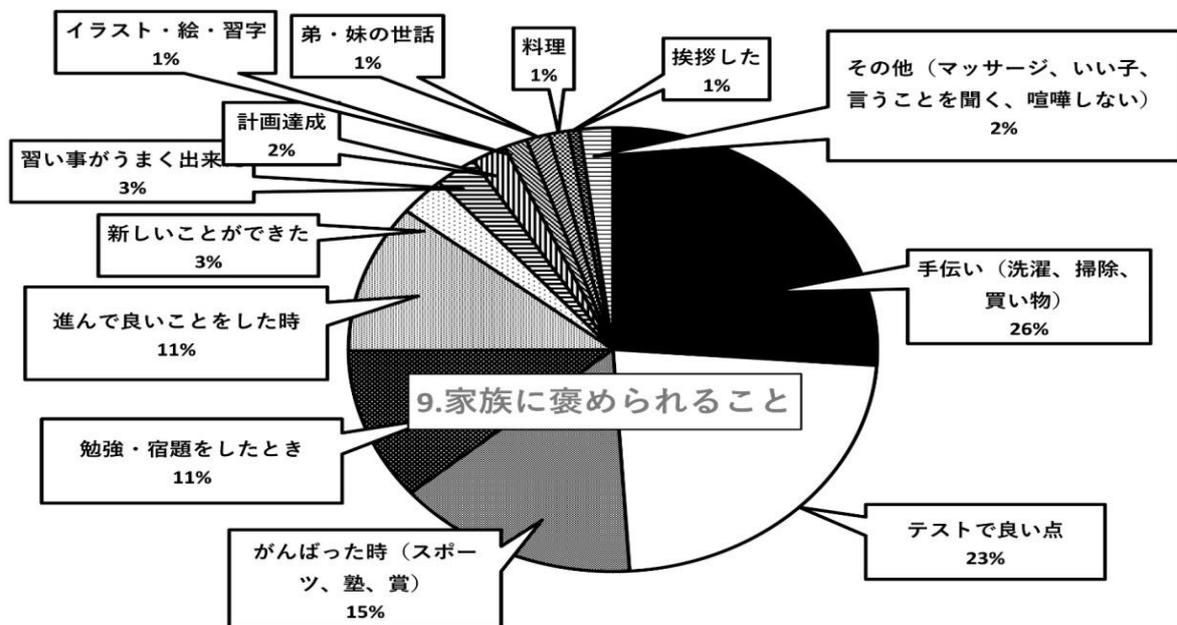
		人数	1人	人数	2人	人数	3人	人数	4人以上
質問9	あなたは、家族のよくほめられる	18	32%	71	31%	45	31%	7	30%
	人にほめられます	31	54%	107	47%	72	49%	13	57%
	か。								
	あまりほめられたことが無い	8	14%	48	21%	30	20%	3	13%
小計		57		226		147		23	

兄弟姉妹別にみると、「ほめられる」回答は、1人 86%，4人以上 87%，3人 80%，2人 78%と兄弟姉妹関係による家庭環境が伺える。大人社会が、子ども一人ひとりに気を配る心がけが必要と感じられる。

「どのような時にほめられたか」の回答を、下図でまとめた。

回答の多い順では、「手伝い（洗濯、掃除、買い物）」26%、「テストでよい点を取った時」23%、「がんばった時（スポーツ・塾・入賞）」15%、「進んでよいことをしたとき」、「勉強・宿題をしたとき」各 11%、「習い事がうまくなってきた」、「新しいことができた」各 3%、「計画達成」、「その他（けんかをしなない・マッサージ・言うことをきく）」各 2%、「弟・妹の面倒をみた」、「イラスト・習字・絵が上手に描けた」、「料理をした」、「挨拶ができた」各 1%

ほめられた子どもの結果から、日常的に大人が、きめ細かく声をかけていくことが「ほめる」ことにつながっているように受け止められる。



## 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑨】

### 【解説】

世代間交流に心掛けて、若者の言い分、大人の言い分を聴き合う「傾聴」で、相互理解に努めましょう。



## 質問10. あなたは、毎日家族と楽しく過ごしていますか。

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問10	楽しく過ごしている	157 70%	179 73%	336 72%
あなたは、毎日家族と楽しく過ごしていますか。	まあまあ楽しく過ごしている	60 27%	58 24%	118 25%
	どちらかといえば楽しく過ごしていません	6 3%	1 0%	7 1%
	楽しくない	1 0%	2 1%	3 1%
	どちらともいえない	1 0%	4 2%	5 1%
小計		225	244	469

子どもの生活基盤である「家庭環境についての問に対して、全体的には「楽しい」72%、「まあまあ楽しい」25%、「楽しい」家庭環境である回答は、97%である。

「どちらかといえば楽しく過ごしていません」、「どちらともいえない」3%は気になる。

男女別では、「楽しく過ごしている」は、女性73%に対して、男性70%は、こうした面からも、男性の居場所的存在が消極的な傾向にある。

		人数 祖父母同居	人数 親子のみ	人数 その他
質問10	楽しく過ごしている	86 72%	246 72%	5 83%
あなたは、毎日家族と楽しく過ごしていますか。	まあまあ楽しく過ごしている	31 26%	85 25%	1 17%
	どちらかといえば楽しく過ごしていません	2 2%	5 1%	0 0%
	楽しくない	0 0%	2 1%	0 0%
	どちらともいえない	1 1%	4 1%	0 0%
小計		120	342	6

家族構成別では、祖父母同居が、わずかではあるが「楽しく過ごしている」家庭環境である。

		人数 1人	人数 2人	人数 3人	人数 4人以上
質問10	楽しく過ごしている	43 77%	170 71%	105 71%	14 64%
あなたは、毎日家族と楽しく過ごしていますか。	まあまあ楽しく過ごしている	12 21%	61 26%	37 25%	7 32%
	どちらかといえば楽しく過ごしていません	0 0%	4 2%	3 2%	0 0%
	楽しくない	1 2%	1 0%	0 0%	1 5%
	どちらともいえない	0 0%	2 1%	3 2%	0 0%
小計		56	238	148	22

兄弟姉妹別では、ほぼ同じような家庭環境で、それぞれ「楽しく過ごしている」傾向にある。

### 【家庭・家族に関することから“福祉ってなに?”を読み取る】

「福祉」の基盤は、家庭・家族であることを念頭に、家族とのコミュニケーション、子どもの行為を認め合う、楽しい家庭・家族環境を考察した。

1. 家庭・家族とのコミュニケーションは良好な環境を維持していることが理解できた。さらに、大人社会の歩み寄りの工夫と、男性においては、会話の機会が少なく、学年別（年代別）では、年代とともに会話が少ないことや、親子別では、祖父母同居別よりも会話が少ない傾向が伺えた。
2. 家族の温かい恵まれた環境から、子どもは大きく心身共に成長すると感じられる。常に声をかけることの必要性が感じられる。自発性を促し、さらに小さな出来事にも目を配り、家庭生活の中に数多く子どもの行動を「ほめる」ことに置き換える機会を見つける心がけをしていきたい。ここでも、男性よりも女性の方が、ほめられる傾向にある結果である。コミュニケーション力の弱さからも、男性への関わり方を工夫していきたい。日常的に、大人がきめ細かく声をかけていくことが「ほめる」ことにつながっているように受け止められる。
3. 「家庭が楽しい」回答が大半を占めている地域であることは、楽しい地域環境とも置き換えられる。

#### 4. 地域社会・地域活動に関すること（質問 11. ～質問 22.）

##### 質問11. あなたは、地域でどのようなことに心がけていますか。

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問 1 1	あなたは、地域			
	（自治会、町内			
	会、子ども会等）			
	でどのようなこと			
	に心掛けています			
	か。主なものを3			
	つまで答えて下さ			
	い			
	電車やバスの中で席を譲る	36	45	81
	点字ブロックの上に自転車を置かない	43	52	95
	体の不自由な人に道路を譲る	30	32	62
	困っている人に声をかける	37	65	102
	自分から進んであいさつをする	148	174	322
	わからない	29	26	55
	特に何もしない	16	11	27
	その他	2	5	7
小計		341	410	751

日頃、身近な地域で、子どもたちはどのようなことに心がけているのかを問い質した。全体の回答結果では、「自分から進んであいさつをする」43%で一番多い回答である。次に、「困っている人に声をかける」14%、「点字ブロックの上に自転車を置かない」13%、「電車やバスの中で席を譲る」11%、「体の不自由な人に道路を譲る」8%、「わからない」7%、「特に何もしない」4%、「その他」1%の回答順であった。

「その他」の回答では、「横断歩道を渡る」、「落とし物を交番に届ける」、「ゴミはゴミ箱へ捨てる」、「ゴミ拾い」、「登校時間を守る」、「ポイ捨てをしない」等、より具体的な回答があった。

今回の調査から、子どもたちは、地域社会に向けて、コミュニケーションを心がけていることが伺える。こうした努力を、まず家庭において心がけるとともに、大人社会は、日頃から子どもたちは挨拶もできないと否定的な受け止め方をせず、どのように子どもたちに向かって、自然に働きかけていけばよいかを工夫していくことが求められる。男女別の回答で、多い順に回答を挙げると、男性は「自分から進んで挨拶をする」、「点字ブロックの上には自転車を置かない」、「電車やバスの中で席を譲る」、「困っている人に声をかける」が挙げられる。女性は、「自ら進んで挨拶をする」、「困っている人に声をかける」、「点字ブロックの上に自転車を置かない」、「電車やバスの中で席を譲る」と、少し回答傾向が異なる。

		人数 4年生	人数 5年生	人数 6年生
質問 1 1	あなたは、地域			
	（自治会、町内			
	会、子ども会等）			
	でどのようなこと			
	に心掛けています			
	か。主なものを3			
	つまで答えて下さ			
	い			
	電車やバスの中で席を譲る	32	22	27
	点字ブロックの上に自転車を置かない	36	30	29
	体の不自由な人に道路を譲る	30	16	16
	困っている人に声をかける	42	29	30
	自分から進んであいさつをする	102	99	120
	わからない	21	14	20
	特に何もしない	8	7	12
	その他	5	2	0
小計		276	219	254

#### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑩】

##### 【解説】

「そばにてくれる、それでいい……」なんて歌がありました。それだけで「癒される人間関係」をご近所で心掛けましょう。



日頃、心がけていることはなにか、学年別の回答結果では、4年生は、「自分から進んであいさつをする」37%で一番多い回答である。次に、「困っている人に声をかける」15%、「点字ブロックの上に自転車を置かない」13%、「電車やバスの中で席を譲る」12%、「体の不自由な人に道路を譲る」11%、「わからない」8%、「特に何もしない」3%。5年生では、「自分から進んであいさつをする」45%で一番多い回答である。次に、「点字ブロックの上に自転車を置かない」14%、「困っている人に声をかける」13%、「電車やバスの中で席を譲る」10%、「体の不自由な人に道路を譲る」7%、「わからない」6%、「特に何もしない」3%。6年生では、「自分から進んであいさつをする」47%で一番多い回答である。次に、「困っている人に声をかける」12%、「点字ブロックの上に自転車を置かない」、「電車やバスの中で席を譲る」各11%、「わからない」8%、「体の不自由な人に道路を譲る」6%、「特に何もしない」5%で、多少年代別では異なる回答結果となっている。

「自分から進んであいさつをする」は、全ての学年で一番回答が多い。

## 質問12. あなたは、すすんで他人のためになにかをしてあげたいと思いますか。

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問12	あなたは、すすんで他人のためになにかをしてあげたいと思いますか	149	192	341
	そう思う	66%	76%	71%
	そう思わない	11%	6%	4%
	どちらともいえない	43%	32%	16%
	わからない	22%	24%	10%
小計		225	254	479

「すすんで他人のためになにかをしてあげたいと思うか」の質問に対して、全体的な回答では、「そう思う」71%で一番多く、思いやりのある優しい心を持った子どもたちが多いことが伺える。

この心がけが持続でき、成功体験ができ、地域に役立つ実践活動ができる地域づくりを大人社会が努力していくことが求められるとともに、「わからない」10%、「どちらともいえない」16%、「そう思わない」4%の回答に対しても、さらに積極的な働きかけを期待したい。

男女別では、「そう思う」66%に対して、女性は76%と、10%高い回答。「どちらともいえない」の回答は、男性19%に対して、女性13%と、女性の方が受け止め方ははっきりとしている。

男性の「わからない」10%に対して、女性は9%と、女性の方が前向きな回答傾向にある。

		人数 4年生	人数 5年生	人数 6年生
質問12	あなたは、すすんで他人のためになにかをしてあげたいと思いますか	122	93	127
	そう思う	75%	66%	73%
	そう思わない	2%	7%	4%
	どちらともいえない	27%	23%	14%
	わからない	12%	17%	10%
小計		163	140	175

家族構成別にみると、「そう思う」は、親子のみ72%に対して、祖父母同居は68%と低い。「わからない」は、親子11%に対して、祖父母同居7%の回答である。

## 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑪】

### 【解説】

伝統的な祭りや食文化は、次世代に伝えてゆかねばなりません。身近な地域の「地域文化」の発見と発展に。



### 質問13. あなたは、近所の人とよく話をしますか。

		人数 男性		人数 女性		人数 全体	
質問13	よく話す	48	22%	70	29%	118	26%
	あなたは、近所の 人と話をしますか	143	67%	150	61%	293	64%
	あいさつをするくらい	18	8%	20	8%	38	8%
	話をしない	6	3%	4	2%	10	2%
	誰が住んでいるのかわからない						
	小計	215		244		459	

近所の人と話をするか質問に、全体的回答結果では、「挨拶ぐらいはする」64%と一番多い回答である。次に、「よく話をする」26%、「話をしない」8%、「誰が住んでいるのかわからない」2%である。

この結果から、大人社会が、積極的に子どもたちに呼びかけられる環境づくりに心がけていくことが求められる。つまり、「語れる環境」にしていくことが、福祉を理解する第一歩とも読み取れる。この視点から、地域社会の課題としてあげることができる。男女別にみると、「よく話す」女性 29%に対して、男性は 22%で、男性の消極性が伺える。「あいさつをするくらい」は、女性 61%に対して、男性 67%とやや高い。

「話をしない」は、男女別では同じ割合である。ご近所福祉への関わりは、全体的には、ほぼ対等な関係にある。日頃から、地域とのコミュニケーションを養う場として、大人社会が環境を整えていきたい。

		人数 4年生		人数 5年生		人数 6年生	
質問13	よく話す	48	31%	29	21%	41	25%
	あなたは、近所の 人と話をしますか	92	60%	96	69%	105	64%
	あいさつをするくらい	12	8%	10	7%	16	10%
	話をしない	1	1%	5	4%	3	2%
	誰が住んでいるのかわからない						
	小計	153		140		165	

学年別の回答結果では、「よく話す」、「あいさつぐらいはする」等「前向きに話す機会を持つ」回答では、4年生 91%、5年生 90%、6年生 89%である。「話をしない」6年生 10%、4年生 10%、5年生 7%である。

ここでは、5年生の回答から、ややご近所との関わりが消極的回答傾向に伺えた。

		人数 祖父母同居		人数 親子のみ		人数 その他	
質問13	よく話す	29	24%	88	27%	0	0%
	あなたは、近所の 人と話をしますか	78	65%	210	63%	6	100%
	あいさつをするくらい	10	8%	28	8%	0	0%
	話をしない	3	3%	6	2%	0	0%
	誰が住んでいるのかわからない						
	小計	120		332		6	

近所の人と話をするかを家族構成別に考察すると、「よく話す」は、親子 27%に対して祖父母同居 24%で、祖父母同居は消極的傾向あり。「あいさつをするくらい」は、祖父母同居 65%に対して、親子のみ 63%と、祖父母同居が前向きである。

### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑫】

#### 【解説】

回覧板は最も身近な情報伝達の手段です。家族みんなに伝え、お隣さんにも一声かけ、内容をしっかりと理解し合ひましょう。



		人数 1人	人数 2人	人数 3人	人数 4人以上
質問13	よく話す	18 32%	53 23%	42 28%	4 18%
	あなたは、近所の 人と話をしますか	31 55%	150 66%	93 63%	16 73%
	あいさつをするくらい 話をしない	4 7%	21 9%	11 7%	1 5%
	誰が住んでいるのかわからない	3 5%	4 2%	2 1%	1 5%
小計		56	228	148	22

兄弟姉妹別の回答結果では、「前向きに交流に努めている傾向」は、4人以上・3人各91%、2人98%、1人87%と、兄弟姉妹が多い方が積極的傾向にある。1人の家庭における、大人社会の近所との交流の工夫が挙げられる。

#### 質問14. あなたは、地域が行うイベントにはよく参加しますか。

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問14	あなたは、地域（自治会、町内会、子ども会等）が行う行事に参加していますか	65 30%	97 40%	162 35%
	よく参加している	84 39%	95 39%	179 39%
	時々参加している	39 18%	30 12%	69 15%
	あまり参加していない	26 12%	22 9%	48 10%
	まったく参加していない			
小計		214	244	458

厳しい社会状況の中で、子どもたちの社会性を高める地域行事の参加状況を問い質した。

全体的な回答結果では、「よく参加している」35%、「時々参加している」39%と、「積極的な参加傾向」の回答が74%。「参加しない傾向」の割合が、25%である。男女別では、「積極的な参加傾向」は、女性の79%に対して、男性69%と、女性の方が10ポイント積極的な回答結果である。

この結果から、大人社会は、さらに魅力ある行事の継続化に取り組み、男性の参加呼びかけを工夫したい。

		人数 4年生	人数 5年生	人数 6年生
質問14	あなたは、地域（自治会、町内会、子ども会等）が行う行事に参加していますか	52 34%	56 40%	55 33%
	よく参加している	64 42%	46 33%	69 42%
	時々参加している	19 13%	24 17%	26 16%
	あまり参加していない	17 11%	14 10%	15 9%
	まったく参加していない			
小計		152	140	165

これを、学年別（年代別）の結果で見ると、「積極的な参加傾向」は、4年生76%、6年生75%、5年生73%と、4年生の地域行事への参加が一番高く、次に6年生、5年生の順である。

		人数 1人	人数 2人	人数 3人	人数 4人以上
質問14	あなたは、地域（自治会、町内会、子ども会等）が行う行事に参加していますか	17 31%	83 36%	56 38%	6 27%
	よく参加している	21 38%	93 41%	56 38%	8 36%
	時々参加している	7 13%	32 14%	24 16%	3 14%
	あまり参加していない	10 18%	20 9%	12 8%	5 23%
	まったく参加していない				
小計		55	228	148	22

兄弟姉妹関係は、2人77%、3人76%、1人69%、4人以上63%。2人～3人の地域行事参加傾向が伺える。

### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑬】

#### 【解説】

子どもも家族や地域を構成する一員です。日頃から手伝いで「子どもの居場所づくり」をしましょう。



## 質問15. あなたが住んでいる地域は、とてもよい地域だと思いますか。

子どもたちに、それぞれの地域の良さを問い質した結果、全体的な回答結果では、「とても良い」47%、「良い」45%と、「良い地域」という回答は、92%と高い。「わからない」が5%であった。

子どもたちにとって、厳しいコロナ禍の現状でも、「良い地域」との回答が多いことに関して、大人社会が子どもを地域社会につなげている努力の一面が伺える。また、子どもたちにとっては、成長段階における貴重な社会体験の学び合いの機会にもなっている。昨年度の「ご近所福祉その意識と実態調査」結果では、大人社会の地域コミュニティへの希薄化が浮き彫りになっている状況にあって、子どもたちが望む「地域の良さ」を大人社会は、さらに努力し、思いやりのある子どもたちを育む地域づくりに向けて積極的に取り組みたいところである。

男女別全体回答結果では、「良い」男性93%、女性91%と、やや男性の回答が上回っているがほぼ同じ結果である。

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問15	とても良い	92	125	217
		48%	51%	47%
あなたが住んで	良い	108	97	205
る地域は、良い地	あまり良くない	7	3	10
域だと思えますか	よくない	0	2	2
	わからない	8	17	25
		4%	7%	5%
	小計	215	244	459

		人数 4年生	人数 5年生	人数 6年生
質問15	とても良い	82	68	68
		54%	49%	41%
あなたが住んで	良い	63	59	82
る地域は、良い地	あまり良くない	2	4	4
域だと思えますか	よくない	0	0	1
	わからない	6	9	10
		4%	6%	6%
	小計	153	140	165

学年別の「良い地域」との回答結果は、4年生95%、5年生・6年生各91%である。

質問14の「地域のイベント参加」の回答結果で、「積極的な参加傾向」は、5年生73%、4年生76%と、4年生の地域行事への参加が高い回答結果との関係が繋がると感じられる。

良い地域環境は、子どもたちにとっては、積極的に地域参加をする気持ちを高める要因の一つと感じられる。

## 質問16. あなたの住んでいる地域の良いところはどこですか。

ここでは、質問15に関連して、「地域の良さ」を回答した具体的な内容である。

全体的回答を多い順に挙げると、「近所の人が優しい」28%、「自然が多い」21%、「遊ぶ場所がある」15%、「犯罪が少ない」11%、「静かな場所」10%、「交通事故が少ない」・「地域の行事が多い」各5%、「交通の便が良い」3%、「その他」2%。その他の回答では、「挨拶が多い」、「危ない場所がない」、「学校が歩いて2分で近い」、「空気がおいしい」、「ゴミが少ない」、「災害が少ない」、「魚がいっぱい」、「近くになんでもある」、「友達がたくさんいる」、「友達が優しい」、「友達の家が近くにある」、「にぎやか」、「古い建物が残っている」、「みんなでいつも賑やか等、実に細かな視点で地域の良さを回答している。

男女別回答結果から読み取れたことは、男性26%、女性30%と、ともに「近所の人が優しい」回答は多い。

「遊ぶ場所」は、女性の回答が男性より多い。

「自然が多い」は2番目、「遊ぶ場所がある」が3番目に多い回答結果は、管内は、長年の大区画整理事業により発展し、地域の環境が整うとともに新興住宅地と化している状況がこうした調査結果からも伺える。

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問16	自然が多い	105 23%	105 20%	210 21%
質問15.で「①とて	近所の人優しい	118 26%	160 30%	278 28%
も良い」「②良	犯罪が少ない	58 13%	46 9%	104 11%
い」と答えた人に	交通事故が少ない	26 6%	27 5%	53 5%
聞きます。どんな	静かな場所	47 10%	52 10%	99 10%
点が良いですか。	地域の行事が多い	24 5%	29 6%	53 5%
主なものを3つま	交通の便が良い	14 3%	12 2%	26 3%
で答えて下さい	遊ぶ場所がある	64 14%	82 16%	146 15%
	その他	5 1%	13 2%	18 2%
小計		461	526	987

### 質問17. あなたの住んでいる地域の良くないところはどこですか。

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問17	自然が少ない	3 20%	1 11%	4 17%
質問15.で「あまり	近所の人から怒られる	0 0%	0 0%	0 0%
良くない」「良く	近所の人と交流がない	1 7%	0 0%	1 4%
ない」と答えた人	犯罪が多い	0 0%	1 11%	1 4%
は、どんな点が悪	交通事故が多い	0 0%	2 22%	2 8%
くないですか。主	騒音がうるさい	5 33%	3 33%	8 33%
なもの3つまで	交通の便が悪い	1 7%	0 0%	1 4%
答えて下さい	地域の行事が少ない	2 13%	0 0%	2 8%
	遊ぶ場所がない	2 13%	1 11%	3 13%
	その他	1 7%	1 11%	2 8%
小計		15	9	24

質問17は、質問15に関連して、「地域のよくないところ」を回答した具体的な内容である。

全体的回答を多い順に挙げると、「騒音がうるさい」33%、「自然が少ない」17%、「遊ぶ場所がない」13%、「地域の行事がない」、「交通事故が多い」、「その他（田舎・道にゴミが捨てられている）」各8%、「近所の人との交流がない」、「犯罪が多い」、「交通の便が悪い」各4%である。

### 質問18. あなたは、地域の行事参加の呼びかけがあれば参加しますか。

今回の調査活動の重点的質問項目の一つである。

厳しいコロナ禍で、閉鎖的な地域環境により、子どもたちの活動範囲が制約され、積極的な地域活動が阻止されることによる、地域の人たちとのふれあい交流から育まれる「福祉の心」がいかに閉ざされるか、気になるところである。そこで、こうした環境に対して、子どもたちの心境はどうかを問い質すこととした。閉ざされた地域環境を特に気にしていないか、それとも、開放的な地域環境を期待し、積極的な地域参加を望んでいるかの回答結果と受け止めた。全体的な結果では、「地域参加」を「ぜひ参加したい」と回答した子どもは28%で、男性よりも、女性の回答の方が多い。「できる範囲で参加したい」回答は53%で、男性54%に対して女性は53%である。

#### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑭】

##### 【解説】

穏やかで笑顔の溢れる繋がりが人間関係を継続させます。「さりげない付き合い」でより良い関係を創りましょう。



この回答は、子どもを取り巻く生活環境からの判断（習い事等）とも受け止められる。

全体的に「参加意向」回答は、81%と高い。そして、男女別では、男性 78%に対して女性 84%と、女性の方が、積極性が伺える。

「わからない」の回答は、全体で12%。男女別では、男性 15%、女性 10%は、厳しいコロナ禍で、地域社会を気にした回答とも受け止めることができる。社会の厳しい状況からの回答の側面と、もう一つ、考察したい一面は、「地域行事の魅力」を取り上げたい。子どもが関心を持つ行事であるかを検討していきたい。マンネリ化した行事から、子どもたちの気持ちを組み入れた行事の工夫を大人社会が心がけているかの課題を提起していきたい。子ども目線で交流できる地域行事、また、子ども主体・運営による地域行事の工夫は、近い将来につなげられる、若者の地域離れを防ぎ、大人社会と子ども社会の融合によるまちづくりにつながり、「福祉意識」が高まると考えられる。このことは、「参加しない」、「わからない」18%の回答からも一考したい。

		人数 4年生	人数 5年生	人数 6年生	
質問18	あなたは、地域（自治会・町内会・子ども会等）の行事参加の呼び掛けがあれば参加しますか	ぜひ、参加したい	47 32%	33 24%	45 28%
		出来る範囲で参加したい	78 53%	73 53%	89 55%
		参加したくない	8 5%	9 7%	11 7%
		わからない	14 10%	23 17%	18 11%
小計		147	138	163	

学年別（年代別）に見ると、「積極的な地域参加傾向」は、4年生 85%、8年生 83%、5年生 77%の順で、4年生がこうした社会状況にあつて、地域行事への参加を強く望んでいることがわかる。

		人数 祖父母同居	人数 親子のみ	人数 その他	
質問18	あなたは、地域（自治会・町内会・子ども会等）の行事参加の呼び掛けがあれば参加しますか	ぜひ、参加したい	46 39%	77 24%	2 33%
		出来る範囲で参加したい	53 45%	185 57%	2 33%
		参加したくない	9 8%	19 6%	0 0%
		わからない	9 8%	44 14%	2 33%
小計		117	325	6	

家族構成別に地域参加の動向を見ると、祖父母同居では、「積極的な参加傾向」は84%、親子のみでは、81%と、やや祖父母同居は、祖父母が地域とのつながりをつくっている環境にあるとも受け止められる。

「わからない」の回答からも、家庭環境の側面が感じられる。

		人数 1人	人数 2人	人数 3人	人数 4人以上	
質問18	あなたは、地域（自治会・町内会・子ども会等）の行事参加の呼び掛けがあれば参加しますか	ぜひ、参加したい	17 31%	65 29%	38 26%	4 19%
		出来る範囲で参加したい	23 43%	122 54%	85 59%	8 38%
		参加したくない	5 9%	15 7%	6 4%	3 14%
		わからない	9 17%	23 10%	16 11%	6 29%
小計		54	225	145	21	

兄弟姉妹別に見ると、「積極的な参加傾向」は、回答の多い順では、3人 85%、2人 83%、1人 74%、4人以上 57%。地域の行事への積極的な参加傾向は、3人、2人、1人、4人以上の順。

## 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑮】

### 【解説】

助け合いの輪は地域の隅々まで広げなければなりません。隅々まで「地域の福祉力」をみんなで発揮しましょう。



## 質問19. あなたは、地域の人にほめられたことがありますか。

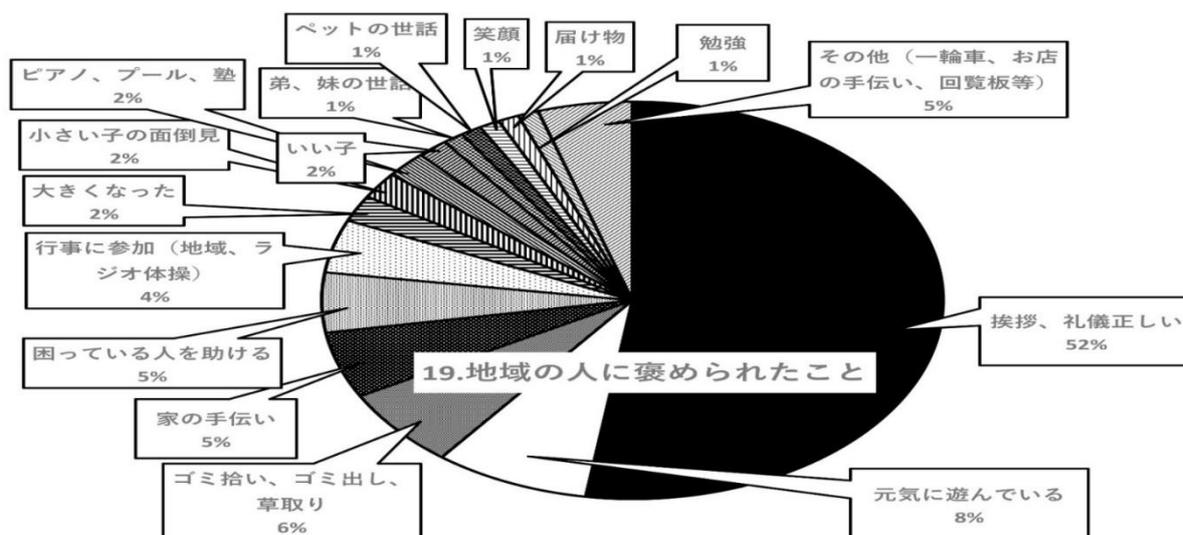
	人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問19 あなたは、地域の人にほめられたことがありますか	81	105	186
ある	38%	44%	41%
ない	62%	56%	59%
小計	215	240	455

子どもを取り巻く大人社会は、いかに子どもたちへの関わりを持っているかを「地域の人にほめられる」側面から考察した結果、全体的な回答結果は、「地域の人にほめられたことがない」が59%と多い回答であった。

「地域の人にほめられたことがある」が41%であった。これまで、よく大人社会からは、子どもたちに声をかけても返事も無い、反応がない、積極性に乏しいなどの意見をよく聞いていたが、改めて、今回の調査を通じて考えていかなければならないことは、常日頃から、積極的に大人社会から、子どもたちに声をかけ、安心できる地域環境をつくる努力をどこまで取り組んできたかを振り返ることが、こうした問いかけから、改めて必要と感ぜられる。

先に考察した質問13.「近所の人とよく話をしますか」の回答結果から、「よく話をする」が26%、「あいさつ程度」64%の回答などから、総合的に考察できることは、大人社会は、常日頃から子どもへの歩み寄りを積極的に働きかけていたかの反省点に立ち、今一度「語れる地域環境づくり」に向けた、地域ぐるみの取り組みとして、大人社会の努力が求められているように感じられる。つまり、子どもを育む地域づくりに、これまで以上に、大人社会は子どもたちに働きかけていく課題がある。「地域の人からほめられた内容」をまとめると、下記のグラフのとおりである。

特に、回答の多い内容を挙げると、挨拶・礼儀正しい52%と、半数以上を占める。次に、元気に遊んでいる8%、ゴミ出し・草取り6%、家の手伝い・困っている人を助ける各5%と、日常生活圏域で、子どもたちと向き合う環境の中で受け止められる。



### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー①⑥】

#### 【解説】

住み慣れた地域で、思いやりやお互い様の気持ちを広げたいものです。「地域ぐるみの福祉教育」を目指しましょう。



		人数 4年生	人数 5年生	人数 6年生
質問19	あなたは、地域の人	60	59	68
	ある	40%	43%	41%
	にほめられたことが	91	79	97
	ない	60%	57%	59%
小計		151	138	165

学年別に見ると、「ほめられたことがある」回答は、5年生43%で多く、6年生41%、4年生40%。学年別の考察から読み取れることは、年齢を問わず、子どもには機会があるごとに、歩み寄り、声を掛け合う地域社会を心がけていきたい。

		人数 祖父母同居	人数 親子のみ	人数 その他
質問19	あなたは、地域の人にほめ	50	134	2
	ある	42%	41%	33%
	られたことがありますか	68	196	4
	ない	58%	59%	67%
小計		118	330	6

家族構成別に見ると、祖父母同居の子どもは43%、親子のみの子どもは41%と、「ほめられる」ことが多いと受け止められる。祖父母同居は、子どもを取り巻く環境において、祖父母が近所で子どもをつないでいる環境にあるとも伺える。

## 質問20. あなたは、「赤い羽根共同募金」のことを知っていますか。

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問20	あなたは、「赤い羽根共同	176	205	381
	募金」のことを知ってい	84%	85%	85%
	ますか	33	35	68
	知らない	16%	15%	15%
小計		209	240	449

		人数 4年生	人数 5年生	人数 6年生
質問20	あなたは、「赤い羽	110	125	145
	知っている	74%	91%	90%
	根共同募金」のこと	39	13	16
	知らない	26%	9%	10%
小計		149	138	161

本会はこれまで、市民からの尊い赤い羽根共同募金による助成事業に取り組み、よりよい地域づくりをめざして、積極的に地域活動に取り組んでいる。

今回の調査は「福祉ってなに?」をテーマに取り組んでいることから、重点的調査項目として、「赤い羽根共同募金」について問い質すこととした。全体的回答結果では、「知っている」85%、「知らない」15%であった。

既に、学校教育において、関連した学習が行われていることから、今回の調査では、子どもの回答から「赤い羽根共同募金」の理解度を含めた回答傾向とも受け止められる。

回答者の中では、コメントとして名称の理解はあるが、どのような内容であるかの理解ができていないと答えている回答者もいた。男女別では、「知っている」は、女性85%に対して、男性は84%であった。

また、学年別（年代別）では、「知っている」は、5年生91%、6年生90%、4年生74%であった。わずかではあるが、意外と、5年生の「赤い羽根共同募金」への関心が高いようにも伺えた。

### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑰】

#### 【解説】

ボランティア活動を始めするには一寸とした勇気が必要です。さあ、**はじめの一歩**、その勇気でボランティア活動が始まります。



この「赤い羽根共同募金」の回答結果を通じて、改めて大人社会に向けた課題提起をあげることができる。身近な戸別募金を通じて、家族や家庭内で赤い羽根共同募金の仕組みを話題にしていくこともできる。しかしながら、今日ではその都度、個別に赤い羽根共同募金を集める状況にはなっていない。

自治会・町内会は、時期が来れば、各世帯から徴収した町内会費を一括して、まとめて処理する時代にもなり、本当の意味での募金活動が展開されていないため、表面化していない一面がある。また、「職域募金」を通じて、家庭内でも話題にしたいところである。「学校募金」は、子どもの日頃の小遣いからの協力も話題としたいものである。こうした行動が「福祉ってなに？」につながることを期待したい。学校教育だけに委ねることなく、地域や家庭・家族領域において、赤い羽根共同募金を通じて、福祉を学ぶことができる。これまでの、長い歴史の中で、市民が主体となった福祉活動の意義を、単なる理論だけの学びから、社会の仕組み・営みの中で、実践的に学び合うことは重要なことでもある。

## 質問21. あなたは、日常生活の情報はどこから得ていますか。

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問21 あなたは、身近な地域の情報はどこから得ていますか。主なものを3つまで答えて下さい	家族	157	174	331
	友だち	79	94	173
	ラジオ・テレビ	100	88	188
	ネット	39	37	76
	新聞	23	19	42
	市広報誌	6	8	14
	回覧板	23	51	74
	学校	74	78	152
	公民館だより	2	6	8
	スーパー・商店等の掲示版	1	1	2
	自治会・町内会発行広報誌	1	3	4
	口コミ	2	5	7
	チラシ	6	9	15
	その他	0	2	2
	特にない	5	11	16
	小計	518	586	1104

この質問も、今回の調査活動の重点的質問項目である。

ネット時代を迎え、果たして子どもたちは、福祉に関する情報はどのように得ているか、新たな情報時代に向けた関心事でもある。全体の回答では、「家族」30%、「ラジオ・テレビ」17%、「友だち」14%、「学校」14%、「ネット」、「回覧板」各7%、「新聞」4%、「公民館だより」、「市広報誌」、「口コミ」、「チラシ」各1%の順であった。

男女別で、目立った回答では、女性は、「ラジオ・テレビ」より「友だち」の方が多いが、男性は「友だち」よりも「ラジオ・テレビ」の方が多い。「ネット」は、男性の8%に対して女性は6%と低い。

### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑱】

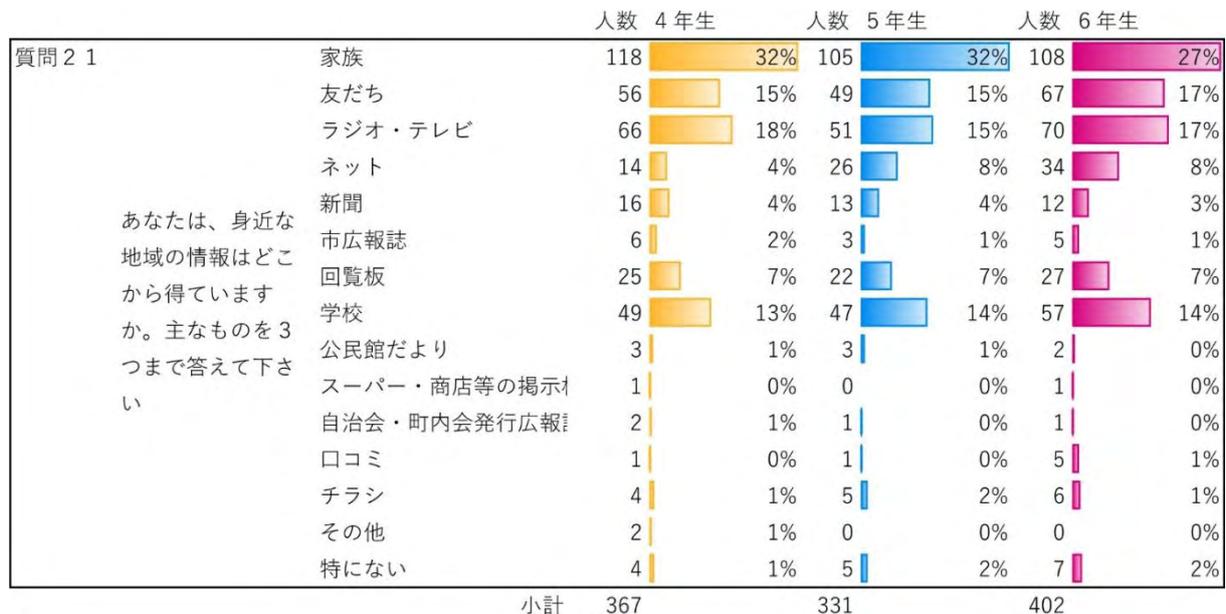
#### 【解説】

子どもの安全・安心をいかに確保していくか、今社会全体の問題となっています。地域全体で「子どもの見守り・声かけ」を。

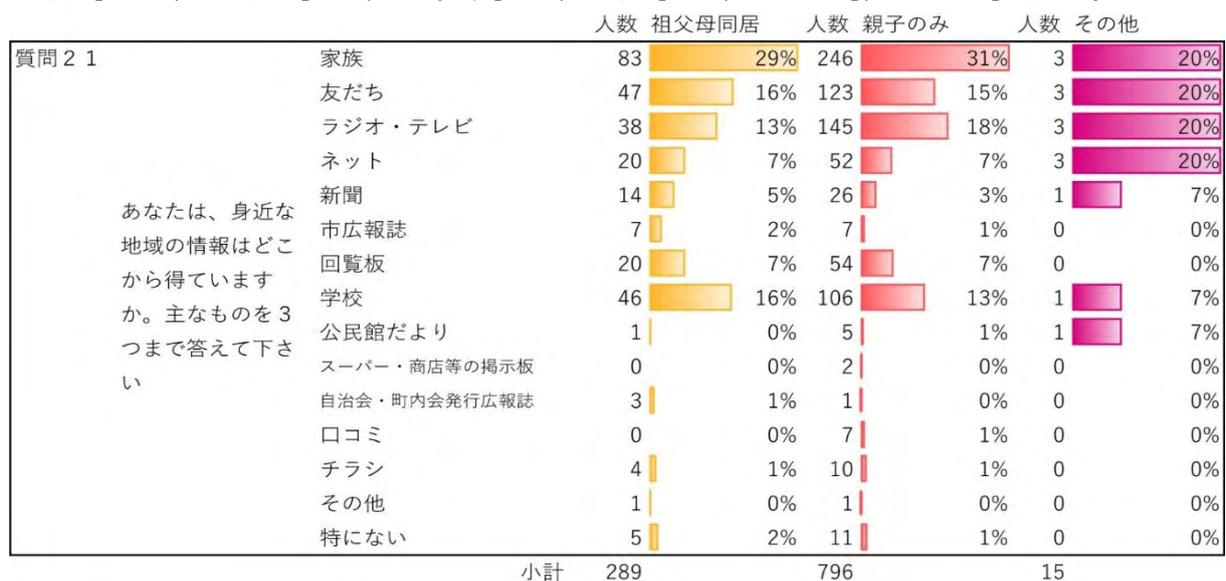


「回覧板」の回答があったことは、身近な情報を、子どもたちにも目を通すことができる家庭環境を維持していることが伺える。「回覧板」の回答では、女性の9%に対して男性は4%で、女性の方が、回覧板を見る方が多いと伺える。上位ではないが、「ネット」の回答があることは、今の時代を物語っている。

今後、情報提供の仕組みが大きく変化することが予測される。しかし、「家族」、「学校」の回答が上位を占めていることから、大人社会が子どもたちに、日頃からわかりやすく身近な地域社会の出来事を伝えていくことが求められている。

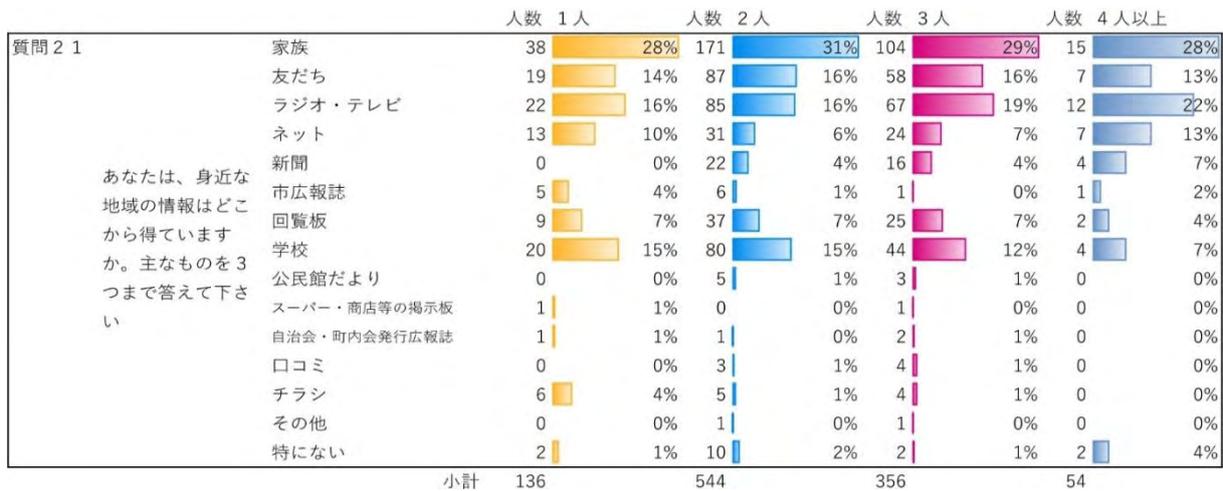


学年別（年代別）に見ると、4年生は、「家族」32%、「ラジオ・テレビ」18%、「友だち」15%、「学校」13%、「回覧板」7%、「ネット」、「新聞」各4%、「公民館だより」、「市広報誌」、「自治会・町内会発行広報誌」、「チラシ」各1%の順であった。5年生は、「家族」32%、「友だち」、「ラジオ・テレビ」各15%、「学校」14%、「ネット」8%、「回覧板」7%、「新聞」4%、「チラシ」2%、「公民館だより」、「市広報誌」各1%。6年生では、「家族」27%、「友だち」、「ラジオ・テレビ」各17%、「学校」14%、「ネット」8%、「回覧板」7%、「新聞」3%、「チラシ」、「口コミ」各1%。



家族構成別では、家族からの情報は、祖父母同居29%に対して、親子31%である。

「ラジオ・テレビ」は、祖父母13%に対して、親子18%、「友だち」からの回答は、「親子」が15%で「祖父母同居」は16%。「学校」は、祖父母同居16%に対して、親子は13%。「ネット」は祖父母同居、親子のみとも7%。



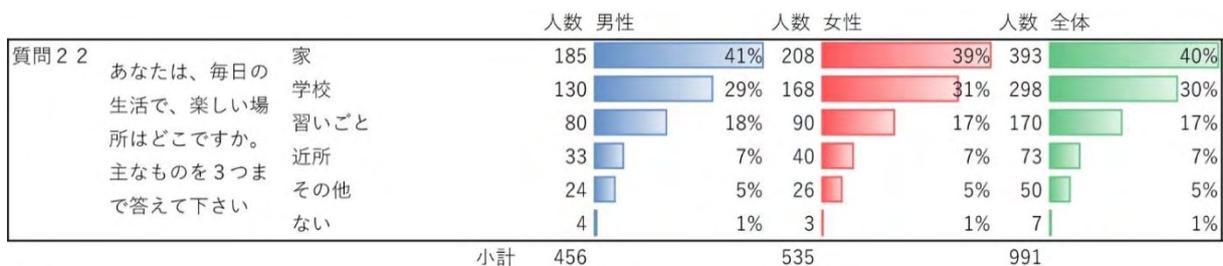
兄弟姉妹別の回答結果から読み取れるのは、1人は「家族」、「ラジオ・テレビ」、「学校」、「友だち」、「ネット」、「回覧板」、「市広報誌」、「チラシ」の順。2人では、「家族」、「友だち」、「ラジオ・テレビ」、「学校」、「回覧板」、「ネット」。3人では、「家族」、「ラジオ・テレビ」、「友だち」、「学校」、「回覧板」、「ネット」の順。4人以上では、「家族」、「ラジオ・テレビ」、「友だち」、「ネット」、「学校」、「新聞」、「回覧板」の順。

兄弟姉妹領域では、「家族」が共通して一番多い。そして「友だち」または「ラジオ・テレビ」。

1人では、「ネット」の情報は上がってこないが、2人以上では、情報入手には「ネット」が加わってくる。コミュニティにおいて、重視している「回覧板」は、何らかの形で、情報入手の方法の一つになっていることをしっかりと受け止めておきたい。

子どもたちにとって、「学校」からの情報入手も大きな役割を持っていることがわかる。こうした点では、学校教育関係者と地域とのつながりは、常に大切にしていきたいものである。子どもたちが、地域で福祉を学び、実践して、地域で子どもたちを育む環境を整えていく上で、改めて発達段階等総合的に「わかりやすい」、「見える化」した情報の在り方を考えていきたい。

## 質問22. あなたは、毎日の生活で、楽しい場所はどこですか。



### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑱】

#### 【解説】

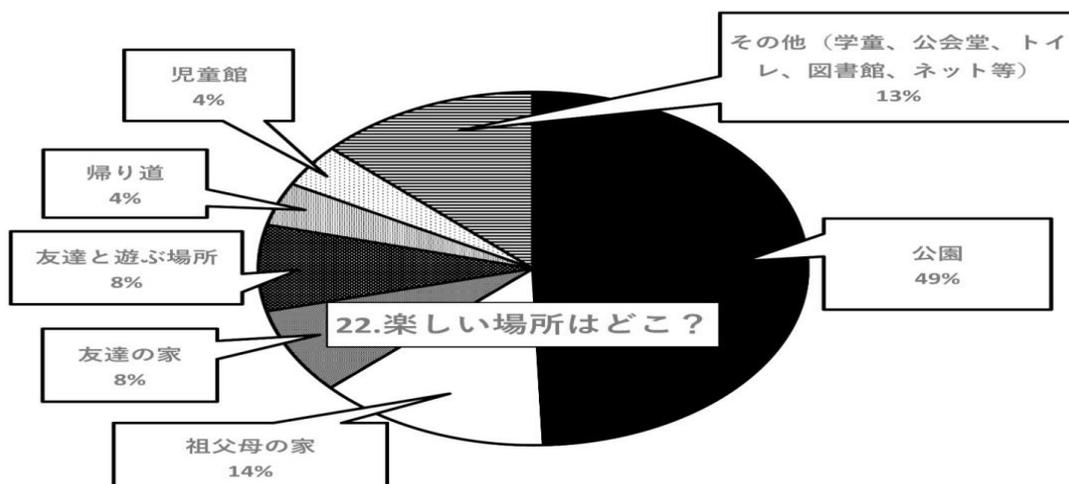
ふれあいの濃さは時間の長さではありません。さりげない日常会話（家庭機能）で「家庭力」を向上しましょう。



厳しいコロナ禍下、そして、大人社会の地域コミュニティ意識の希薄化が浮き彫りになっている、子どもたちを取り巻く環境について、子どもたちにとって「楽しい居場所」を問い質した。

全体的な回答結果から、一番楽しい居場所は「家」40%であった。次に「学校」30%、「習い事」17%、「近所」7%、「その他」（下記グラフで内容提示）5%、「ない」1%の回答順であった。

いずれにせよ、大人社会が、常に子どもたちが楽しく生活できる家庭・地域環境の維持に努めていく努力が必要である。



男女別に回答の多い順に考察すると…

女性…「家」39%、「学校」31%、「習い事」17%、「近所」7%、「その他」5%、「ない」1%

男性…「家」41%、「学校」29%、「習い事」18%、「近所」7%、「その他」5%、「ない」1%

この比較からすると、男性は、女性よりも「家」が楽しいと回答。女性は、学校が男性よりも楽しいと受け止めている。

質問	回答	人数	割合	人数	割合	人数	割合
質問22 あなたは、毎日の生活で、楽しい場所はどこですか。主なものを3つまで答えて下さい	家	136	40%	121	40%	136	39%
	学校	97	29%	93	30%	107	31%
	習いごと	57	17%	52	17%	61	18%
	近所	31	9%	20	7%	22	6%
	その他	16	5%	19	6%	15	4%
	ない	2	1%	0	0%	5	1%
小計		339		305		346	

学年別に回答の多い順に考察すると…

4年生…「家」40%、「学校」29%、「習い事」17%、「近所」9%、「その他」5%、「ない」1%

5年生…「家」40%、「学校」30%、「習い事」17%、「近所」7%、「その他」6%、「ない」0%

6年生…「家」39%、「学校」31%、「習い事」18%、「近所」6%、「その他」4%、「ない」1%

回答順に変化はないが、「学校」は成長とともに楽しいと回答あり。

成長とともに、「近所」の楽しい居場所の回答が少ない。

## 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑳】

### 【解説】

ハイという返事だけでは物足りません。一言添えて「感謝の心」を常に表していきましょう。



		人数	祖父母同居	人数	親子のみ	人数	その他	
質問2 2	あなたは、毎日の生活で、楽しい場所はどこですか。主なものを3つまで答えて下さい	家	104	40%	284	39%	5	42%
	学校	76	30%	219	30%	2	17%	
	習いごと	45	18%	121	17%	3	25%	
	近所	17	7%	54	8%	1	8%	
	その他	14	5%	35	5%	1	8%	
	ない	1	0%	6	1%	0	0%	
小計		257		719		12		

家族構成別に回答の多い順に考察すると…

祖父母同居…「家」40%、「学校」30%、「習い事」18%、「近所」7%

親子のみ……「家」39%、「学校」30%、「習い事」17%、「近所」8%

## 【地域社会・地域活動から“福祉ってなに?”を読み取る】

本調査では「子ども自身の生活」、「家族・家庭の関わり」から、「福祉ってなに?」の側面を浮き彫りにしてきた。ここでは、12の質問項目の「地域社会、地域活動参加」の関わりから、子どもたちの「福祉観」を浮き彫りにし、取り巻く大人社会への問題提起とする考察をした。

- 子どもたちの意識の中には、自ら地域社会に向けて、挨拶をしようとコミュニケーションに心がけていることが伺える。ご近所との関係も含め、こうした意識をさらに実践につなげるためには、大人社会は家庭における心がけとともに、近所づきあいを通じて、広く地域社会において、子どもたちに向けた自然な働きかけに心がける努力が求められる。
- 「思いやりの心」を持っている子どもたちが多いことが回答結果から伺える。こうした気持ちを実践し、成功体験につなげ、地域に役立つことができる地域環境をいかに維持していくか、これからの大人社会の課題と受け止めることができる。
- 厳しいコロナ禍により、地域行事はなくなり、また中止が続いている。これまでの地域づくりは、住民の地域参加の機会を多く作り、世代を超えた地域交流により、地域ぐるみのささえあいの環境が生まれてくる。厳しい社会環境にあって、今回の回答から、子どもたちの地域行事（イベント）への参加は、約7割と積極的傾向にある。地域行事参加は、男性より、女性の方が積極的であることが伺える。
- 地域の住みよさを問い質し、果たして子どもたちの福祉の心を育む地域であるかを、子どもたちから回答いただいた結果、92%の子どもから「良い地域」という回答があった。その内容は、「近所の人優しい」が最も多く、28%の回答である。すでに「福祉の心を育む地域」であることが子どもからの回答と伺える。
- 「家庭内でほめられる」81%から、ここでは、地域の中でほめられたかの質問の結果、「ある」41%であった。これまでも、地域におけるコミュニケーションの希薄化傾向を指摘してきたが、ここでも、大人社会に向けた大きな課題が投げかけられている結果である。
- 身近な募金活動として、「赤い羽根共同募金」について問い質した結果、「知っている」85%、「知らない」15%の結果であった。家庭や地域社会の中で、身近な募金活動を通じて、「福祉ってなに?」を学び合う環境をこれからも提供できるように心がけたい。
- 福祉など身近な情報を、子どもたちはどのように入手しているのか問い質したところ、今日、社会ではネット情報が先行している中ではあるが、回答結果からは大人社会における「家庭」、「学校」からの入手が多く占めていた。しかし、子どもたちを取り巻く生活環境に、「ネット」9%の回答が確実に伺われた。中でも、女性6%に対して、男性8%と男性の活用傾向が強い結果であった。身近な地域コミュニティ組織の中で機能している「閲覧板」は、子どもたちから7%の回答が寄せられている。家族が地域を知る身近な情報源として、大切に機能を活かしていきたい。
- 子どもたちにとって「楽しい」と思われる居場所を問い質した。その結果、一番楽しい居場所は「家」40%、次に「学校」30%、「習い事」17%、「近所」7%、「その他」5%であった。福祉を育む「家庭」が一番楽しい居場所である回答が多かった。これからも、楽しい家庭環境を築き上げていくことを、大人社会は大いに努力していかなければならない。「学校」も、子どもたちは楽しい居場所と捉えている。「近所」の回答は、男女とも7%の回答。

## 5. 福祉との出会い（ふれあい交流）に関すること（質問 23.）

質問23. あなたは、高齢者や障がいのある人とのふれあい交流をしたことがありますか。

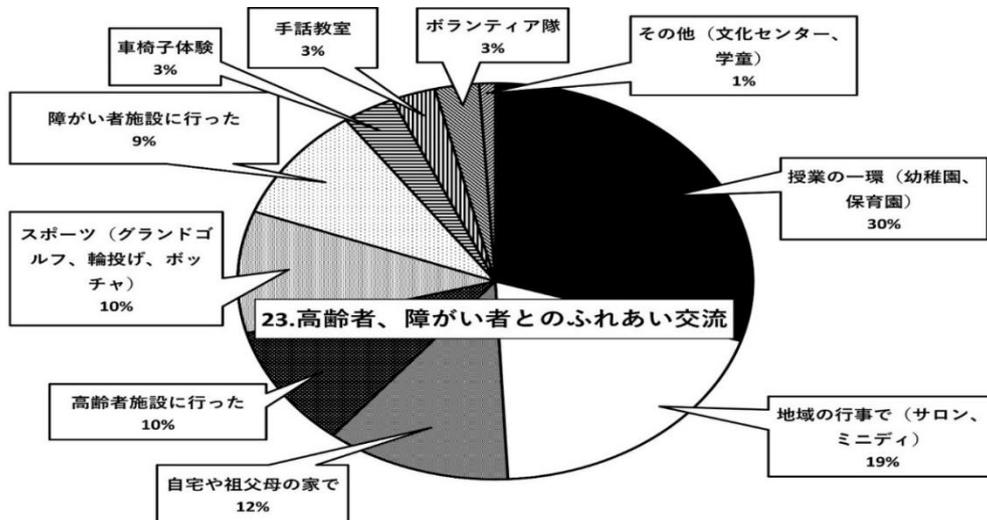
「福祉ってなに？ 461名の子どもたちに聞きました」の本調査では、日常的に身近な生活圏域において、高齢者や障がい者等のふれあい交流等、福祉体験の機会が提供されているかを問い質した。発達段階における「福祉の学び」は、小学生の「ふれあい交流」、「感動体験」は、非常に大切であると感じられる。そして、上級学年に進み、「福祉を探求する学習」に進み、さらに、社会の中の課題解決への行動・提言へと期待できる。そうした意味から、小学生には「まずは、実体験からの一歩」が必要と感じられる。今日では、学校教育において、より具体的な福祉教育的観点で発達段階により学びの場を持っていると認識している。ここでは、厳しいコロナ禍下、また、大人社会の地域コミュニティの意識が希薄化している状況下で、現状を問い質した。

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
質問 23	あなたは、高齢者や障がいのある人とふれあい交流をしたことがありますか	83	121	204
	ある	39%	50%	45%
	ない	130	121	251
		61%	50%	55%
小計		213	242	455

高齢者や障がい者との交流について問い質した全体の回答結果は、「ある」45%、「ない」55%。男女別回答結果では、「ある」の回答では、女性50%に対して、男性39%の回答である。「ある」の回答の主な体験内容は、下記のグラフの状況である。

「保育園・幼稚園訪問」30%、「地域の行事参加（サロン・ミニデイサービス・居場所）」19%、「自宅や祖父母の家」12%、「スポーツで交流」10%、「高齢者施設訪問」10%、「障がい者施設訪問」9%、「車いす体験」、「手話教室」各3%、「地域のボランティア活動」3%等。

子どもたちとともに、大人社会がともにふれあいながら、生活圏域の中で福祉体験の機会を持つようにしていきたい。



### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑳】

【解説】

我が子だけでなく近所の子達も見守りたいものです。近所の子にも声を掛けて「**地域の子どもは地域で育む福祉力**」向上を目指しましょう。



## 【福祉との出会いから“福祉ってなに?”を読み取る】

学校教育では、確実に発達段階に応じた教育カリキュラムの中で取り組まれている福祉教育が、果たして私たちの身近な地域社会において、「地域の子どもを地域で育む」子どもたちと大人社会が共に福祉実体験やふれあい交流の場がしっかりと提供されているかを問い質した。

1. 「学校」, 「授業」による福祉実体験やふれあい交流が行われている中で、地域社会の視点で、この項目をまとめると、「ある」45%, 「ない」55%の回答結果である。  
これからの地域社会においては、「意図的な体験・ふれあい交流」の場の設定を課題にしていくことが求められる。今回の調査の意図は、「厳しいコロナの状況」と「大人社会のコミュニティへの希薄化」が危惧されるこの時期に、子どもたちの思いやりの心をいかに育てるかを課題提起としている。こうした社会状況におけるこれからの取り組みに、積極的な福祉を実体験できる環境の確立に努めていきたい。
2. 「福祉実体験・交流がある」と回答のあった内容から、「ミニデイサービス・サロンでの交流」, 「自宅の祖父母・友だちの高齢者との出会い」等、すでに、私たちの身近な生活圏域では、幅広い交流体験ができる機会があることが子どもたちの回答からわかった。  
「生活をすべて福祉化」する中で、子どもたちが生活そのものの中から「福祉」を読み取れる環境を大人社会が構築していけるよう常に努力をしていきたい。

## 6. これからの地域の支え合いへの提言（質問 24.）

### 質問24. あなたにとって「安心してみんなで楽しく暮らせる地域」とは「どんな地域ですか？

461名の子どもから、「安心してみんなで楽しく暮らせる地域」について、自由に回答していただいた。厳しいコロナ禍下、子どもたちを取り巻く地域環境を踏まえ、「福祉ってなに？」をもとに、「安心して、みんなで楽しく暮らせる地域」について回答し、大人社会に向けた提言として意見を集約した。

自由回答とした、この項目のまとめ方について、本会では、「調査部会」において、自由な回答をそのまま、取りまとめるかどうかを検討した。その結果、調査の最終考察をする上で、回答内容から「キーワード」をもって統計的考察をすることとした。取りまとめた「キーワード」(内容)の多い順に挙げると、

- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| ✓ 犯罪がない         | ✓ 交通事故がない        |
| ✓ あいさつ・優しさ・思いやり | ✓ 挨拶・声掛け・話合い・会話  |
| ✓ 安心・安全         | ✓ 楽しい            |
| ✓ 自然が多い         | ✓ 助け合う           |
| ✓ 笑顔がある         | ✓ 仲良く            |
| ✓ 公園・遊び場がある     | ✓ 行事・イベントがたくさんある |

## 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー②】

### 【解説】

いろいろな人が暮らし合って当たり前の近所。一声かけて安心し合える地域づくりを日頃のお付き合いの中から作り出す努力をしましょう。



男女別に回答内容で多い順に考察すると…

➤ 男性

- ✓ 犯罪がない … 20%
- ✓ 交通事故がない … 11%
- ✓ 安心安全 … 10%
- ✓ 挨拶・声掛け・話し合い・会話 … 9%
- ✓ 楽しい … 7%
- ✓ 優しい・思いやり・親切 … 7%
- ✓ 公園・遊び場がある … 5%
- ✓ 自然が多い … 4%
- ✓ 助け合う … 4%

➤ 女性

- ✓ 犯罪がない … 13%
- ✓ 優しい・思いやり・親切 … 12%
- ✓ 交通事故がない … 10%
- ✓ 挨拶・声掛け・話し合い・会話 … 9%
- ✓ 安心・安全 … 8%
- ✓ 楽しい … 8%
- ✓ 自然が多い … 5%
- ✓ 助け合う … 5%

女性は、「優しい・思いやり・親切」12%に対して、男性は7%と、大きな開きがある。

「その他」16%の主な内容は、

- ✓ 交通ルールを守る
- ✓ みんなが協力
- ✓ 誰もが安心して暮せる地域
- ✓ 災害・津波が来ない
- ✓ バリアフリー・エバーサルデザインな地域
- ✓ コト・病気の無い地域
- ✓ 差別のない地域
- ✓ 見守りのある地域

などが挙げられている。

	人 男	人 女	人 全体
犯罪がない	45 20%	39 13%	84 16%
交通事故がない	25 11%	29 10%	54 10%
優しい・思いやり・親切	16 7%	37 12%	53 10%
挨拶・声掛け、話し合い、会話	21 9%	28 9%	49 9%
安全・安心	23 10%	23 8%	46 9%
楽しい	16 7%	24 8%	40 8%
自然が多い	9 4%	16 5%	25 5%
助け合う	8 4%	14 5%	22 4%
笑顔がある	6 3%	16 5%	22 4%
仲良く	5 2%	14 5%	19 4%
公園、遊び場がある	11 5%	6 2%	17 3%
行事・イベントがたくさんある	5 2%	5 2%	10 2%
その他	34 15%	50 17%	84 16%
小計	224	301	526

学年別（年代別）の一番多い回答の「キーワード」は、

- 4年生…「挨拶・声掛け」、「犯罪がない」、「優しい・思いやり」の順
- 5年生…「犯罪がない」、「交通事故がない」、「挨拶・声掛け」
- 6年生…「犯罪がない」が一番多く、「交通事故がない」、「挨拶・声掛け」が同じ回答率

【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー⑳】

【解説】

相手からの挨拶を待つことなく、こちらからさりげない言葉掛けは微笑ましいものです。「声掛け」は私たちから…。



	人	4年	人	5年	人	6年
犯罪、事件がない	28	17%	26	14%	30	17%
交通事故がない	23	14%	17	9%	14	8%
優しい・思いやり・親切	17	11%	22	12%	14	8%
挨拶・声掛け、話し合い、会話	12	7%	14	7%	23	13%
安全・安心	14	9%	15	8%	17	10%
楽しい	12	7%	13	7%	15	9%
自然が多い	12	7%	11	6%	2	1%
助け合う	5	3%	8	4%	9	5%
笑顔がある	1	1%	9	5%	12	7%
仲良く	4	2%	7	4%	8	5%
公園、遊び場がある	5	3%	8	4%	4	2%
行事・イベントがたくさんある	2	1%	5	3%	3	2%
その他	26	16%	33	18%	24	14%
小計	161		188		175	

### 【これからの地域の支え合いへの提言】

厳しいコロナ禍下、子どもたちの「安心して、みんなで楽しく暮らせる地域」の回答から、「キーワード」を総合的に読み取ると…

- (1) **安全で安心**な地域環境が維持されていること
- (2) 自然に恵まれた身近な生活圏域で、子どもたちが伸び伸びと自由に**集まる場所**があること
- (3) 安心して、**ふれあい交流**のできる公共施設（公園）が整備されていること
- (4) 世代間交流が自由にできる地域ぐるみの**地域行事**が継承されていること
- (5) お互いに、**顔が見える関係**が維持されている地域環境があること
- (6) 優しさ・思いやり・助け合いの心を育み、いつでも**挨拶・声掛け**ができる語れる地域環境であること

等が、子どもたちが望んでいる自由回答を「キーワード」でまとめた。

### 【若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー②4】

#### 【解説】

“目は口ほど物と言う”と言われます。「ふれあい」は優しい目から、心から「アイコンタクト」。



## 7. コロナ禍下、調査協力者からの意見

身近な地域課題である「子ども対象の調査実施」に関して、大変厳しい地域環境の中、調査協力をいただいた地域実践者、福祉団体等から、調査票とともに寄せられた手紙（意見）の要点を紹介する。

- (1) なかなか、この夏休み中に、子どもを集めた行事は難しく、調査の呼びかけにも時間がかかってしまった。館内にある「児童館」に協力を呼び掛けて、実施をお願いした。回収期限が過ぎたが回収できた分を送付する。
- (2) 受け取った調査票 10 枚を、地区の子どものお宅を訪ねてお願いした。なかなか、現状の地域社会では子ども目線で現状を把握することができていない。将来につなげるこうした調査の取り組みは、大切であると感じた。今後の地域活動において参考にしていきたい。調査の依頼に、快く引き受けてくれた。
- (3) この現代社会の中で、ともすれば等閑されがちな地域の問題に、きちんと向かい合って取り組むことは重要なことと感じる。大きな取り組みはできないが、小さな取り組みから、地域に向けて大きく訴えていく努力こそ大切なことと感じる。関係者の家族からの調査回答となった。
- (4) なかなか出口の見えない“コロナ”トンネルの中、加えて、猛暑の時期でしたが、依頼された調査票が回収できた。今後、調査結果の公表を待っている。
- (5) 年配の私たちの周辺では、今回の調査の取り組みは困難であったが、日頃の地域活動で、ご縁を創っているグループの皆さんの協力で要請に応えることができた。
- (6) 日頃、貴会の活動をマスコミで知り、地域活動の参考にしている。依頼のあった調査票は、地区の役員の協力をいただき回収できた。結果を楽しみにしている。
- (7) 一向に収まらない新型コロナウイルス、密にならないように、続けていた「居場所」は休むことにした。利用者の中には、「さみしい」、「家にいても不安」、「早くみんなと会いたい」と、意見が出ています。高齢者は、とにかく、会っておしゃべりするだけでいい。顔を合わせるだけでよい。黙って散歩しても面白くない。と、高齡者宅の訪問のできない今日この頃。私たちの「居場所」には、子どもたちが来て、交流もしている。コロナが明けたら、元気な子どもたちを迎えて、楽しいひと時を願っている。交流している子どもから回答をいただいた。
- (8) 大雨やコロナで落ち着かない日々。何とか、近所の子どもたちから 10 名の回答をいただいた。
- (9) 新型コロナウイルス観戦が世界中を騒ぎ立てている今日この頃。果たして、人間社会はどうなってしまうだろうか。私の周辺は、子どもたちが年々少なくなっている。5 枚調査票を回答いただくことができた。
- (10) いつもの夏休みと違い、コロナで、私たちの地域行事は中止で、なかなか調査をお願いすることが難しかったが、関係者の子どもや、市内の塾の協力をいただき、調査を実施することができた。
- (11) 依頼された調査票 5 枚を、4 年生 1 人、5 年生 2 人、6 年生 2 人に回答してもらった。
- (12) 私の住んでいる集合住宅は、高齢者中心で、子どもがいないため友人に頼んだ。
- (13) 常に、地域と向き合いながら、活動に取り組んでいることに頭が下がる。大人社会をいかに意識改革していくかの課題は、今後も続けていくことが必要と感じる。
- (14) 5 枚の調査票の依頼があったが、ようやく 4 枚回収することができた。
- (15) コロナ禍下、従来のふれあい型の地域福祉活動が難しくなっている。これまでのつながりを細くとも、長く保てるような環境整備の課題がある。
- (16) 福祉の現場を離れていたが、久しぶりの調査依頼を受けて、地域のつながりができる気がした。

## 第4章 調査のまとめ

### 1. 子どもたちの尊い意見から「静岡発 福祉文化の創造」を検証

本会は、1996年9月結成以来、「啓発学習事業」、「実践活動地区事業」、「調査研究事業」の「3つの柱立て」で活動を展開してきた。中でも、「調査研究事業」は、「静岡発（地方発）福祉文化の創造」を目指し、その時代の地域社会を取り巻く様々な福祉課題を「調査テーマ」とし、その分析結果を、県内各方面での研修会や本会の公開型研修会などで公表し、世代を超えた「地域総合型学習」を通じて問題提起をし、県民一人ひとりの意識改革に努めてきた。その大半は、下記のように、大人社会を対象に25年間取り組んできた。

- 1997年度 1. 「共働きに関する調査」
- 1998年度 2. 「私たちにとって、地域とは何かーその1ー意識と実態調査」
- 1999年度 3. 「私たちにとって、家族とは何か調査」
- 2000年度 4. 「父親に関する調査」
- 2001年度 5. 「ボランティア活動実践者意識調査」
- 2002年度 6. 「大人を対象とした生きがいと就労に関する意識調査」
- 2003年度 7. 「青少年の生きがいに関する調査」
- 2004年度 8. 「地域とは何かーその2ー意識と実態調査」
- 2005年度 9. 「子どもと社会環境に関する調査」（継続調査）
- 2006年度 10. 「子どもと社会環境に関する調査」（総括）
- 2007年度 11. 「地域活動と団塊の世代の役割に関する意識調査」
- 2008年度 12. 「長寿者の生きがい、その意識と実態に関する調査」（静岡県共同募金会助成事業）
- 13. 「日常生活と福祉情報に関する意識調査」（静岡県委託事業）
- 2009年度 14. 「長寿社会に関する県民意識と実態調査」（静岡県委託事業）
- 2010年度 15. 「いまこそ地域社会に福祉文化を拓く 生活圏域における支え合いとは何か本音に迫る調査」（静岡県委託事業）
- 2011年度 16. 「地域と私の居場所その意識と実態調査」（静岡県委託事業）
- 2012年度 17. 「家族ってなにその意識と実態調査」（静岡県委託事業）
- 2013年度 18. 「長寿者とつながるホッとすご近所づくりその意識と実態調査」（静岡県委託事業）
- 2014年度 19. 「豊かに暮らせる地域づくりその意識と実態調査」（静岡県委託事業）
- 2015年度 20. 「若者の地域参加その意識と実態調査」
- 2016年度 21. 「ご近所福祉その意識と実態調査」
- 2017年度 22. 「居場所ってなにその意識と実態調査」
- 2018年度 23. 「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査」（単純集計）
- 2019年度 「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査」（静岡県社協ふれあい基金助成事業・考察提言）
- 24. 「256名の子どもたちに聞きました。ホッとする地域ですか?」（静岡県社協ふれあい基金助成事業・考察提言）
- 2020年度 25. 「ご近所福祉その意識と実態調査」

今年度は、「子ども対象調査」に取り組み、次世代を担う子どもの声を、しっかりと把握していく必要性を確認し、どのような地域環境を期待しているかを把握することとした。

厳しいコロナ禍下、果たして、今日の地域環境は、地域の子どもたちを地域で育む状況にあるか、今、子どもたちは、思いやりの心が醸成されているかを把握することが急務であると認識し、身近な生活圏域における地域課題を「福祉文化のプロセス」を基盤に「世代を超えた福祉コミュニティの再構築」に向け、現状を子どもの視点から、支え合う地域づくりの地域環境を総合的に改善し、「共生社会」に向けた検証を目的に、「福祉ってなに? 461名の子どもたちに聞きました」調査に取り組んだ。

今年度は、さらに、5年前に長寿者から学んだ「ご近所福祉」を「見える化」、「分かる化」した、住民福祉教育開拓事業として企画制作をした「若者発 ご近所福祉かるた」をもとに、「若者発 ご近所福祉かるた」の増刷及び「若者発 ご近所福祉かるた利用の手引き」を発行した。

本調査報告書に、子どもを対象とした調査に関連づけられる「かるた」の内容を紹介する「若者発 ご近所福祉かるたワンポイントコーナー」を設け、課題解決につながる工夫をした。

## 2. 厳しいコロナ禍下、全県域から予想を上回る調査回答の成果

本会の調査研究活動は結成以来、関係団体、会員、地域実践者、福祉施設、企業等の協力のもと、精力的な調査研究活動に取り組んできた。厳しい社会状況の中、果たして計画予定通りにできるか不安の中、610枚の配布に対して、461枚の回答（回答率75.6%）をいただいた。

これまで、東部及び中部地域からの回答が多い傾向であったが、今回は西部地域からの回答が多く寄せられた。調査に全面的に協力していただいた方々から、地域の子どもの声の考察を期待する意見が多く寄せられた。調査に全面的に協力していただいた多くの方々から、「調査結果」を心待ちにしている意見が多く寄せられた。今回の調査回答率は、これまでに2番目に多かった。

参考までに、これまで26年間の調査事業の回答を多い順にまとめると、

- |  |   |       |
|--|---|-------|
| ➤ 2018・2019年度「子どもを育む調査事業（大人対象）」        | … | 80.1% |
| ➤ 2021年度「福祉ってなに？ 461名の子どもたちに聞きました調査事業」 | … | 75.6% |
| ➤ 2020年度「ご近所福祉その意識と実態調査（大人対象）」         | … | 71.0% |
| ➤ 2017年度「居場所ってなに？ その意識と実態調査（大人対象）」     | … | 65.8% |
| ➤ 2016年度「ご近所福祉その意識と実態調査（大人対象）」         | … | 56.1% |

と、子どもに関する調査活動への関心の高さが読み取れる。

## 3. プロセス重視の「調査研究活動」の検証の意義

結成以来26年間、関係団体等との協働に努め、これまでの諸活動は、その年代の地域課題とともに、「静岡発 福祉文化の創造」の実践活動の重要な活動として「調査研究活動」に取り組んできた。今回は、子どもからの回答をもとに、そこから大人社会に向けて浮き彫りにした課題提起は、地域社会全体でこれからの地域づくりに活かすことを期待したい。

## 4. 子どもの生活状況から“福祉ってなに？”を読み取る

今日、子どもの生活基盤は、固定化・塾・習い事や、親の就労等により、取り巻く社会環境は大きく変化している。子ども自身の選択肢により、自由にのびのびと自発的に行動し、子ども同士の関係づくりの基盤は薄れ、学年が上がるごとに少しずつ制約されていることが伺える。「手伝い」は、子どもたちに、責任感と自発的な行動に移行し、社会性を身に着ける基盤として、大人社会の配慮が期待される。子どもの悩みに、身近な大人社会が常に歩み寄る配慮（特に、父親の存在）が求められる。改めて、家族機能の中で、父親の存在を確立していきたい。

発達段階に応じて協調性を養い、自ら問題解決方法が切り拓かれていくことを期待したい。

友だちの相談に応じようと歩み寄る優しさが読み取れる。大人社会がコミュニケーションのサポート（特に、男性）を側面的に心がけていきたい。

## 5. 家庭・家族に関することから“福祉ってなに？”を読み取る

「福祉」の基盤は、家庭・家族であることを念頭に、家族とのコミュニケーション、子どもの行為を認め合う、楽しい家庭・家族環境づくりを期待したい。大人社会の子どもへの歩み寄り（特に、男性）の工夫、発達段階に応じた語れる環境への工夫をしたい。生活全てで、きめ細かく「ほめる」ことを置き換える機会を心がけたい。

## 6. 地域社会・地域活動から“福祉ってなに？”を読み取る

「思いやりの心」を持っている子どもたちが多く。子どもたちの意識の中には、自ら地域社会に向けて、挨拶をしようとするコミュニケーションに心がけていることが伺える。こうした気持

ちを実践し、成功体験につなげ、地域に役立つことができる地域環境をいかに維持していくか、ご近所との関係も含め、こうした意識をさらに実践につなげたい。そのためには、大人社会は家庭における心がけとともに、近所づきあいを通じて、広く地域社会において、子どもたちに向けた自然な働きかけに心がける努力が求められる。

厳しいコロナ禍により、地域行事はなくなり、または中止が続いている中で、子どもたちの地域行事（イベント）への参加は積極的傾向にある。

地域の住みよさを問い質し、果たして子どもたちの福祉の心を育む地域であるかを、子どもたちから回答いただいた結果、92%の子どもから「良い地域」と回答があった。その内容は、「近所の人が優しい」が最も多く、28%の回答である。すでに「福祉の心を育む地域」であることが子どもからの回答で伺える。

「家庭内でほめられる」81%から、ここでは、地域の中でほめられたかの質問結果、「ある」41%。これまでも、地域におけるコミュニケーションの希薄化傾向を指摘してきたが、ここでも大人社会に向けた大きな課題が投げかけられている結果である。身近な「募金活動」として、「赤い羽根共同募金」について、問い質した結果、「知っている」85%、「知らない」15%の回答結果であった。家庭や地域社会の中で、身近な「募金活動」を通じて、「福祉ってなに？」を学び合う環境をこれからも提供できるように心がけたい。

福祉など身近な情報を、子どもたちは、どのように入手しているかは、今日社会では「ネット」情報が先行している中ではあるが、回答結果は、大人社会における「家庭」、「学校」からの入手が多くを占めていた。しかし、子どもたちを取り巻く生活環境に「ネット」9%の回答が確実に伺われた。中でも、女性6%に対して、男性は8%と、男性の活用傾向が強い結果であった。

身近な地域コミュニティ組織の中で機能している「回覧板」は、子どもたちから7%の回答が寄せられている。家族が地域を知る身近な情報源として、大切に機能を活かしていきたい。

子どもたちにとって「楽しい」と思われる「居場所」は、一番楽しい居場所は「家」40%、次に「学校」30%、「習い事」17%、「近所」7%、「その他（公園、祖父母の家、友だちの家、友だちと遊ぶ場所、児童館等）」5%の順であった。福祉を育む「家庭」が一番楽しい居場所である回答が多かった。これからも楽しい家庭環境を築き上げていくことを、大人社会は大いに努力していかねなければならない。「学校」も、子どもたちは楽しい居場所として捉えている。

## 7. 福祉との出会いから“福祉ってなに？”を読み取る

学校教育では、確実に発達段階に応じた教育カリキュラムの中で取り組まれている「福祉教育」。果たして、身近な地域社会は「地域の子どもの地域で育む」環境にあるかの結果、子どもたちと大人社会が共に福祉実体験やふれあい交流の場を共有し、しっかりと「意図的な体験・ふれあい交流」の場の設定が課題であることが浮き彫りとなった。

「厳しいコロナの状況」と「大人社会のコミュニティの希薄化」を危惧する今日、子どもたちの思いやりの心を育む積極的な福祉実体験ができる環境の確立に努めていきたい。

「生活すべてを福祉化」する中で、子どもたちが生活そのものの中から「福祉」を読み取れる環境を大人社会が再構築していけるよう常に努力をしていきたい。

## 8. これからの地域の支え合いへの提言

厳しいコロナ禍下、子どもたちに問い質した「安心して、みんなで楽しく暮らせる地域」の回答から、「キーワード」を総合的に整理し読み取ると、「自然に恵まれた身近な生活圏域で、安全で安心して、伸び伸びと子どもたちが自由にふれあい交流できる集まる居場所（公共施設）が整備されている地域環境でありたい。」

「お互いに、顔が見える人間関係が維持され、優しさ・思いやり・助け合いの心を育み、いつでも挨拶・声掛けや語れる環境でありたい。」

「世代間交流が自由にできる地域ぐるみの地域行事が継承される地域を望む。」

をまとめることができた。